響　風

Hibiki　Winds

出典：戸田幸一　切り絵作品より

あしや句会

第 6 号

はじめに

平成二十二年「あしや句会」の吟行は太宰府天満宮の初詣に始まり、忘年句会として福岡の西新界隈の吟行で締め括られた。それぞれの事情で全員参加が難しくなっているが、参加できる時に参加できる人で、無理なく楽しく続けることができれば良しである。この一年を振り返れば、博多祇園山笠を東京、千葉貝寄風メンバーと見物したことが一番大きな出来事だろう。志賀島から渡船で福岡市内に入り、大雨警報発令中にもかかわらず「流れ舁き」や朝方の「追い山笠」を追いかけたことは、とりわけ心に残っている。時折どしゃぶりになる雨の中での追い山笠見物は、見終えた安堵と疲労が混じる体をゆっくり休めた後に満足感が湧いてきた。追い山笠見物初めてのメンバーも、同じ思いだったと思う。

昇先生との貝寄風吟行は、五月に京都、十一月に近江八幡で行なわれた。京都は化野念仏寺や嵯峨野のトロッコ列車、北山の深泥ヶ池のじゅんさい採り、社家の径、伏見の十石舟の乗船など盛りだくさんの楽しい内容で、近江八幡では、琵琶湖の沖島、近江商人の作った町並み、安土城址など俳句吟行ならではの吟行地設定で文化、歴史を知る興味深いもので、どちらも京都近辺の見所の多さを再認識する吟行であった。

年が開け、三月十一日東北、関東を未曾有の大地震、大津波が襲った。原子力発電所の放射線漏れも深刻な事態になっている。家や車や人が津波に呑み込まれていく様子やその後の被災地の映像に、ただ声もなく茫然としている。どこから手をつけていいか分からないほどの瓦礫の山と、二万人以上もの死者、行方不明者の数、残された人の心情を思うと、のんびり俳句吟行をしていてもいいのだろうかと思うが、今自分の出来ることは、早い収束と復興を願いつつ、防災を含めて自分の身の回りのことを精一杯やることである。

平成二十三年三月

江本　由紀子

響　風　第六号　目次

■はじめに

■吟行記

第六十三回　太宰府天満宮・・・・・・・・・・1
第六十四回　白野江植物園・・・・・・・・・・7
第六十五回　室見川・飯盛神社・・・・・・・13
第六十六回　駕与丁公園・・・・・・・・・・19
第六十七回　火野葦平旧居（河伯洞）・若戸渡船・・24
第六十八回　北九州と俳句・・・・・・・・・30
第六十九回　志賀島・追い山笠吟行・・・・・35
第七十回　神湊・「魚屋（うおや）」本店・・・・44
第七十一回　高見神社・金毘羅池周辺・・・・・48
第七十二回　宗像大社・みあれ祭・・・・・・52
第七十三回　郷土の女性俳人「竹下しづの女」・・57
第七十四回　百道浜、西南学院大学周辺・・・・61

■自選句

三十二～三十三　平成二十一年十二月～二十二年三月・66
三十四～三十五　平成二十二年四月～七月・・・・68
三十六～三十七　平成二十二年八月～十一月・・・70

■あとがき

吟行記

（第六十三回～第七十四回）

第六十三回吟行記

平成二十二年一月六日（水）

参加者　佳与子　節子　光子　真理子　由紀子

太宰府天満宮（太宰府市）

今年の吟行初句会は太宰府天満宮。一月六日午前十一時西鉄太宰府駅に集合。佳与子さんとＪＲ二日市駅から西鉄二日市駅まで歩き、西鉄太宰府線に乗って二駅目の終点太宰府駅に着く。大きな門松が立ち、「あけましておめでとうございます」の横断幕が掲げられている。いつ来ても参拝者の多い太宰府は、正月から受験シーズンが終わるまでは込み合っているだろうと思ったが、松の内とはいえ平日なのでいつもより少し多いくらいの人出だ。節子さん、光子さん、真理子さんが改札口前で笑顔で待っている。

風避けのための大きなマスクと毛糸の帽子を取って新年の挨拶を交わす。会った瞬間から笑いが起こる。遠慮のない仲間内ならではの会話に新しい年が明ける。

時折小雪のちらつく参道を歩き、御神橋を渡る。左手の絵馬堂の辺りから太鼓の音が聞こえてくる。猿廻しに大勢の人が集まり、拍手が起こっている。その輪に入って見る。人相、猿は猿相とでもいうのか、時折哀れさのみの猿廻しに出会うことがあるが、ここの猿廻しには悲壮感がない。猿曳きの合図にすぐ反応する猿は、役者のように人を楽しませてやろうという余裕のようなものを感じる。

風花の参道となる天満宮　光子

太鼓橋渡りゆく笑み着ぶくれて　真理子

早太鼓いよよ始まる猿廻し　節子

猿曳きの猿に引かせし紐の先　光子

子猿の名太陽といふ雪舐めて　真理子

手拍子を客にも請ふて猿廻し　佳与子

楼門を潜り本殿に向う。ここはさすがに込み合っている。多くの若者が手を合わせ、絵馬を掛けたり、御籤を仲間同士で見せ合ったりしている。まだ「飛梅」は一輪も花をつけていない。本殿の裏手に回って天然記念物の「大楠」を見上げ、「ひろはちしゃの木」の大きな洞を覗き込む。樹齢千年や七百年などの木の下にいると、人間なんて何と小さな存在なのだと思えてくる。

児を抱いて犬も抱き上げ初詣　光子

大冬木守る檜皮の社かな　光子

飛梅の冬芽細かく紅帯びて　真理子

飛梅のふくらみそめし色ほのか　光子

ひと葉なきひろ葉ちしゃの木寒に入る　真理子

梅林を抜けて「お石茶屋」で一服。梅昆布茶と梅が枝餅が美味しい。天満宮の梅が枝餅はどの店のものも美味しいが、参道沿いでは「かさの家」と「松屋」、境内では「お石茶屋」に足が向く。皮がぱりっとしている。

梅が枝餅は道真公が不遇の配所時代に困窮した生活を送っているのを近在の尼さんが見かねて道真公が好んだ梅の枝に添えて焼餅を差し上げたという故事に由来するもので、県内のあちこちに屋台がでているが、太宰府天満宮でいただく梅が枝餅はまた格別である。

小雪が茶屋の前に置かれた床几の上を転がる。目の前のまだ一輪もつけていない梅林に立つ吉井勇の歌碑にも富安風生の句碑にも小雪が舞い散っている。寒くても寒いなりの句を拾おうと、まだ通ったことのない茶屋の奥の径へ行ってみる。「お石さん」が通ったというトンネルを左手に見て坂を登る。稲荷社の前を通り過ぎると一本の径が続く。人で賑わっていた天満宮とは別世界で鳥の声のみが響く。

宮裏の筑紫の山の眠りたる　　由紀子

しばらく歩くと下の方から音楽が聞こえてくる。径を下りきると、笹川良一氏の母親を背負った銅像が立っている。その後ろに遊園地の入口。子供達が小さかった頃ここで遊んだ記憶がある。何年か前にリニューアルされ、以前よりこじんまりしたようだが懐かしい。

「お石茶屋」から小山をひとつ越えて、ようやく広い境内の位置関係がわかる。右回りに国立博物館の入口があり菖蒲池や「曲水の庭」に続く。冬芽をつけた何千本もの梅の木の先に御神橋のかかる心字池や楼門が見える。広い境内を一周したことになる。猿廻しの太鼓も聞こえてくる。猿は衣装替えをしたらしく赤い法被になっている。

曲水の冬枯の庭なにもなく　　真理子

猿ともに赤の法被や猿廻し　　佳与子

鷺替の案内立札高々と　　節子

それぞれに吟行し大鳥居の前に集合する。鳥居の前には明日行なわれる鷺替え、鬼すべの案内板が立てかけられている。飛梅の歌碑や御神牛像、三条実美ら尊攘攘夷派の五卿が滞在したという延壽王院の庭を見ながら天満宮の参道脇の道へ入り食事処へ向う。食事処は真理子さんが予約を入れてくれていた「梅の花　太宰府別荘　自然庵」。「梅の花」の店舗は北九州にもあるが、この自然庵は古民家を改築したものらしく、門構えといい、茶室のある庭といい、落ち着いた趣きのあるお店だ。食べ終えた人も再度庭を眺めて帰って行く。通された個室でゆっくりと食事。料理を運んでくれる係りの人は女性が多いが、この部屋には若い爽やか系の男性が運んでくる。華やいで笑いながらの食事の時間となる。十句の句会。

待合に見る篠垣の冬日かな　　光子

仲居来て鴨居に掛けし毛皮かな　　由紀子

笑い初め笑い通せし句座なりし　　光子

この爽やか系男性が試食用に持ってきた「麩まんじゅう」が美味しく、正月限定の梅昆布茶一缶サービスにも惹かれて「麩まんじゅう」を皆購入して店を後にする。

光明禅寺の山門の前を流れる藍染川に沿って太宰府駅へと歩いて行く。謡曲「藍染川」の舞台になった川である。現在の藍染川は身を投げるにはあまりにも細い川だが、当時は川幅も広く水量も多かったのだろう。「遠の朝廷」と呼ばれた太宰府周辺には万葉の時代からの多くの言伝えや歌が残っている。何度でも来たい所である。西鉄二日駅にて解散。

【道真公の歌碑】

【まだ一輪もない「飛梅」】

【「ひろはちしゃ」の木】

【境内の大楠】

【「うそ」の像】

【本殿裏の絵馬掛け所】

【宮裏の稲荷神社】

【うそ替の案内】

【延壽王院の庭】

【梅の花「自然庵」の庭】

第六十四回吟行記

平成二十二年二月十日（水）

参加者　佳与子　節子　光子　由紀子

白野江植物園（門司区）

昨秋「白野江植物園」の藤袴の花に群れるアサギマダラを見た行った折、ここの楓の木や梅や桜の木の多さに驚き、紅葉や花の季節に訪れたいねと話して帰った。前回のメンバーに節子さんを加えてそれが実現した。

門司港駅十時集合。早めに着いた節子さんが改札口で手を振って迎えてくれる。構内でお弁当を購入し路線バスに乗り込む。朝から雨模様だが土砂降りでなければ雨もまた良しである。路線バスは街中を通り過ぎ、ゆるやかな坂を登っては下る。二十分程で「白野江二丁目」のバス停に着く。

ここから住宅と公園を抜けるとすぐに植物園が見える。入口の階段に「冬ぼたん」の黄色の旗が何本も掲げられている。もう花季が終わっているかと思ったがまだ大丈夫のようだ。雨に濡れた石段を登っていくと、植物園らしい匂いがどこからともなく漂ってくる。

入口の左手に藁苞がゆったりした間隔で立っている。藁苞の中に白や淡いピンク、黄色のぼたんがこぼれるように咲き、来園者は皆カメラを近寄せて撮っている。正面の蝋梅が満開で良い香りを放、枝垂梅がほっほっと花をつけている。園の左手から回ろうと歩きはじめると、そこにも冬ぼたんが花を開かせている。丈は高くはないが、藁苞からはみ出すほど大きな花もあれば、今にも散りそうな花もある。蕾を触ってみると、思っていた以上に固く、あでやかな花弁をぎっしり包んでいるようだ。ピンクの八分咲きの桜は「小福桜」、もう少しで開きそうな蕾をたくさんつけているのは「河津桜」。下の池の辺りは刈り込まれていて殺風景だが、池に動くものがいるかと近づいてみる。水草に何かの卵らしいものが半分隠れている。傘でつついてみる。持ち上げてみる。いつか見た蝌蚪の紐とは違う。大きいからウシガエルかもしれないと勝手に想像する。

ほつほつと梅咲き初めて鶯舞ふて　　佳与子

傘先で持ち上げてみる蚓蚓の紐　　由紀子

先に昼食を済ませてゆっくり園内を回ることにする。入口近くの休憩所に戻る。以前この白野江植物園は個人所有の公園で「四季の丘」と呼ばれていた。その個人の家がそのまま休憩所と管理室になっている。庭先の縁側から靴を脱いで畳の部屋にあがると写真愛好家による作品が展示している。プロによるものではないだろうが動植物の写真や山の風景は見事。他にも絵手紙などが階段入口に掲示されていて小さなギャラリーになっている。一階もゆったりしているが、佳与子さんが予約をいれておいたくれた二階の大部屋でゆっくり弁当を食べることにする。ポットや急須などお茶道具が用意され、ここからは入口付近も広い裏庭もよく見える。句会

もできそうだが、まだ肝心の句が出来ていない。

庭園をまたゆっくり見て回ることにする。山を切り開いて造られたらしい庭は石段やゆるやかな坂道が続いている。臘梅の咲いているあたりから「寒桜」や「鹿児島紅梅」の名札をつけた花が山道を彩っている。椿の種類も多く、「太郎冠者」（タロウカジャ）という淡いピンクの椿や真っ赤な大椿が目を楽しませてくれる。落椿の上に時折吹く風で雨雫が落ちてくる。

臘梅に歩をゆるめつつ上る坂　　佳与子

掌にあまる一花の落椿　　由紀子

雨かとも思ひし梅のしずくかな　　佳与子

枯れ茎で静まりかえっている睡蓮の池を通り抜け、「木洩れ日広場」から「桜広場」へ上っていく。苔生している坂道は朝方までの雨で濡れているので、傘を杖がわりに滑らないように注意深く歩く。桜広場の後ろは展望台のある山頂広場への登り口になっている。前方には海辺近くの町並みと周防灘が広がっている。曇っているので海と空の境がはっきり分からないが、ここからだけでも山に登った気分になる。広場を囲む高い木々に鳥たちの交わす啼き声が響き、水仙の香りが匂い立ってくる。菜の花畑も見えている。

早春の林に鳥の声満ちて

節子

枝の重なり合った桜は冬芽をたくさんつけている。満開の桜に多くの人が集まるだろうと思いつつまっすぐ下に向う。足元には福寿草が黄色の花を咲かせている。しっとりと雨に濡れた園内は、まだ春浅い感じそのままで好ましい。帰りのバスの時間まで少しあるので、一軒のみある茶店に立ち寄りぜんざいを注文する。温かさと甘さがこの日の天気にちょうど良い。

ぜんざいの甘さほどよき春時雨

由紀子

バスに乗り門司港駅まで戻って来る。句会場を門司港ホテルのレストランと決めレトロ街へ入る。ホテル前の「旧大阪商船」のビルにお雛まつりのポスターが張ってあり、見学したことのある佳与子さんの薦めもあってビルの中に入ってみる。段飾りのお雛様も華やかだが、河豚の大きな提灯が門司ならではで面白い。

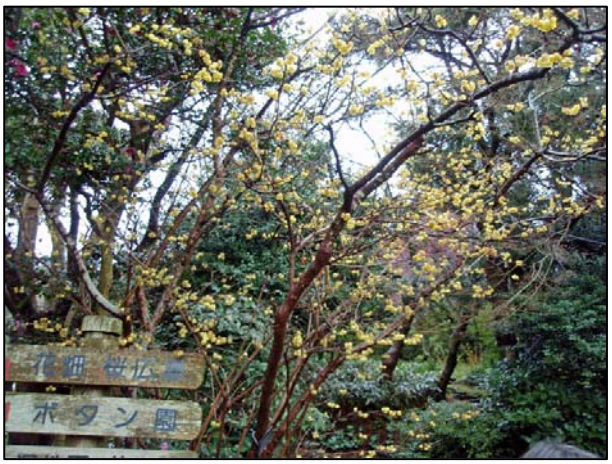
十四時過ぎのレストランはお客が少なく、窓から海峡の見えるテーブル席に座る。風が強まり波立っている。停泊中の白い船には「春風号」と大きく書かれているが一年中同じ名前なのだろうか、跳ね橋はもうすぐ開くのだろうかなど外を見ながら句作する。十句の句会。

門司港の海岸通り野水仙

節子

ホテルを出ると雨が強くなっている。誰ともなく何か食べようかという話しになり即決。門司港名物「焼きカレー」の店が目の前にある。季節の牡蠣の入ったカレーが美味しい。暖まったところで雨の門司港駅へ向かい電車に乗り込み解散。

（今月光子さんは「夏潮」の福岡吟行会、東京の「夏潮新年句会」に出席し活躍。）



【蝋梅】

【しだれ梅】

【河津桜の蕾】

【白梅】

【白野江植物園の梅】

第六十五回吟行記

平成二十二年に三月十二日（金）

参加者　佳与子　節子　光子　真理子　由紀子

室見川・飯盛神社（福岡市西区）

まだ冷たい風の二月中旬、室見川の白魚の簗かけがテレビのニュースにでていた。杭を打ち、竹で作られた簗を次々に組む様子やその後の「シロウオ豊漁祈願祭」の神事が、博多の早春の風物詩として取り上げられていた。以前にも白魚吟行をしたが、神官がお祓いをして始まる漁とは知らず、その映像は印象的でもう一度白魚の簗を見たくなった。

三月十二日（金）地下鉄室見駅に十時半集合。節子さん、真理子さんは車を近くに駐車して北九州組を待っている。予定通り全員集合し、駅から歩いて室見川を渡る。室見川を挟んで早良区と西区にわかれているが、西区側に建っている白魚漁の小屋まで行く。上流の山には二日前に降った雪が残っている。二月、三月は寒暖の差が激しく、二日前には強風と雪で電車が乱れる程で、前回の白魚吟行と同じように震えながらの吟行になるかもしれないと思ったが、幸い雲間から青空が見える穏やかな日となった。

源流はあの残雪の山かとも

由紀子

河川敷に下りて漁小屋を覗いてみる。小屋の前に漁師が一人座って鳩に餌をやっている。今年の漁獲量を聞いてみると不漁らしい。川は濁って川底が見えない。雪や雨の影響もあるが、少し上流で行なわれている護岸工事の影響もあるらしい。今年に入って雨が降ることが多く工事が遅れていると言う。退屈そうな漁師は、客でもなさそうな私たちに何の会かと聞いてくる。俳句や短歌などのグループがよく立ち寄るらしく、またかという顔をしながらも気軽に尋ねたことに答えてくれる。簗の上や回りにはユリカモメが群れ飛び、時折急降下して魚を捕っている。よく見るとカモメは何度も捕り損っている。簗には白魚だけではなく、鱸の子、エイ、シャコ、鰻、鮎など海や川に棲む色々な魚がかかるらしい。簗から少し下流の河口から博多湾が広がり、湾の向こうは豊かな漁場の玄海灘だ。

裏返す白魚舟にも魚具を干し　佳与子

白魚の川に柄杓とバケツ持ち　由紀子

白魚を捕る胴長の薄手にて　光子

川岸に白魚料理の小屋出来て　節子

白魚に俄か造りの料理屋も　光子

白魚の不漁をかこつ日向ぼこ　佳与子

白魚の簗にうなぎも鮎も入り　真理子

三百年続く白魚漁というから、以前はもっと小屋も多かったのだろうが、今は両岸に漁小屋一軒と横に白魚を食べさせるプレハブの小屋一軒。平日の午前中なので河川敷に下りて来る人もいないが、河畔公園にもなっている両岸の桜が美しく咲く下旬には、この時期にしかない白魚を求めて賑わうのだろう。

河川敷の近くに止めていた真理子さんの車で、博多湾沿いに走っている都市高速の下を抜け、住宅街と高層マンションが建ち並んでいる室見川の河口近くまで行く。川に沿って遊歩道が整備され、対岸のシーサイドももち海浜公園や福岡タワー、ヤフードームがよく見える。この辺りもマリナタウン海浜公園として美しい砂浜が続き、能古島がすぐ横に見え、志賀島が正面に見える。美しい景観と干潟では潮干狩り、河川敷や遊歩道ではジョギングやウォーキングを楽しむことのできる福岡の観光スポットとなっている。一帯は臨海埋立地区に一九八九年、市制施行百周年を記念して開催された「アジア太平洋博覧会」（通称よかトピア）の後できた街である。

埋立てし街がこの町花ミモザ　真理子

強東風や河口に近き遊歩道　佳与子

潮風に木の肌荒れし桜かな　真理子

博多湾は水鳥の宝庫といわれる和白の干潟があるが、この室見川の河口辺りにも多くの水鳥を見ることができる。この日も鴨の大群が河口から川に向って浮かんでいる。行列のように皆同じ向きに並び、時折突風に驚い

た鴨が飛び立ってはまた列に戻っている。流れに逆らって進んでいるように見えるが、川を上っている風でもない。種類ははっきりはしないが、これが室見川河口に多いと言われるスズガモかもしれない。

人工海浜の細かいさらさらとした砂浜を歩く。西の方にマリノアシティの日本最大の観覧車が見える。大型商業施設にできた大小観覧車は人気があったが、去年九月に大観覧車の営業を終了している。潮風をいっぱい吸い込んで遊歩道を戻り車に乗り込む。

涅槃西風止まったまゝの観覧車　　節子

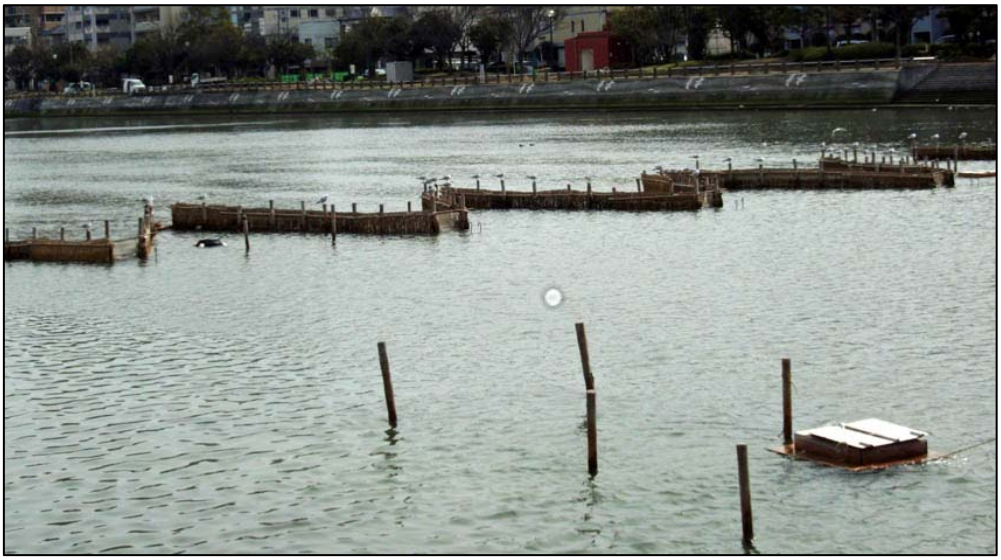
島ふたつ陽炎ふ浜の砂を踏む　　真理子

繰り返し群れなして飛び帰る鴨　　光子

食事処は前回と同じ「よひら」。愛宕山の裏手の中腹にあり、個室で海や街を眺めながらのんびり料理を楽しむことができる。前回は真理子さんが皆のために漁小屋で白魚を購入し、この「よひら」の同じ部屋で、借りた器の中に白魚を泳がせて皆で句を作ったことを思い出す。愛宕山の駐車場に止めていた節子さんの車と真理子さんの車二台で「飯盛山」に向う。愛宕山散策を予定していたが、駐車場から見える「飯盛山もよかよ！」の一言に皆賛同。急遽室見川の上流方面へ車を走らせる。正にお茶碗をひっくり返してご飯が丸くなった形をした山でその麓にある飯盛神社に着く。創建は九世紀の由緒ある神社。鏑馬神事が行なわれるらしく境内に像が建っている。また春にも草鹿式（くさじししき）という弓を射る行事があり案内の張り紙が貼られている。神事の行なわれる広場は道路を挟んだ駐車場の横にあり、道路も神事用に緑色の舗装がされている。弓道場があり、その奥に小さな文殊堂がある。わきには智恵の水が湧き出ているとかで、水汲みの人がきている。真理子さんの家の氏神様という飯盛神社は見所が多く、特に流鏑馬は一度見てみたいと思う。

弓練場的出てをらず黄水仙　　真理子

どこをどう走ったかわからないが、この辺りは真理子さんの生活の場。まかせっきりで付いていく。「ジョイフル」で十句の句会。少し冷たい春の風に吹かれての吟行はとても内容の濃いものとなり一日を楽しむ。地下鉄の駅まで送ってもらい解散。



【室見川の簗】

【マリナタウン海浜公園よりの「能古島」】

【マリナタウン方面】

【食事処「よひら」の食事と店内】

【飯盛神社前と神社内】

【文殊堂】

【流鏑馬の碑】

【弓道場】

【飯盛神社】

第六十六回吟行記

平成二十二年に四月七日（水）

参加者　佳与子　節子　真理子　由紀子

駕与丁公園（粕屋町）

今年の福岡市の桜開花宣言は三月十四日。去年の十三日に次ぐ早い記録で平年より十二日早いらしい。普通は開花宣言から一週間か十日位で満開になるが、普通でないのが最近の特徴。温暖化で開花は年々早くなっているが、今年は宣言後の冷え込みでなかなか花が開かず、満開は二週間から二十日前後の三月下旬から四月の初めとなった。寒暖の差が激しい毎日に、なかなか花見の計画を言いだせないでいたが、近郊の桜の開き具合をみてようやく動き始める。といっても今回も節子さんに電話して計画の丸投げ。

ようやく七日に駕与丁公園を吟行することに決まる。桜は散り始めると早いので、その頃になると残花だろうが、満開より俳句は作りやすいのではないかと期待する。

吟行当日の七日の天気は曇のち晴、風強し。最高気温十四度。肌寒い。佳与子さんといつもの折尾駅九時十三分の快速電車二両目で合流。佳与子さんは風邪気味でマスク着用、時折咳込んでいる。日頃の美しい声がかすれている。香椎駅で香椎線宇美行きに乗り換え、二十分ほどで「酒殿（さかど）駅」に着く。雲雀の鳴く田んぼや畑の中にぽつんと建つ小さなプレハブ駅は無人駅のようだが、駅員が一人いる。対面の上りのプラットホームの椅子に帽子とマスク姿の節子さん、真理子さんが座って待っている。こちら側は無人で切符は箱の中に入れるようになっている。同じ電車で下りた初老の女性は手に持っている切符をどうしたらよいのか戸惑っている。駅前の一本の桜の花が風に散り、広い田んぼの中の駅は明るく長閑である。線路を横切り、二人と合流し、ここまで車で初めて来たという真理子さんの車で駕与丁公園まで行く。

雲雀野にベンチひとつの駅舎かな　佳与子

踏み切りを渡り駅まで雲雀の野　真理子

雲雀野に長きホームや無人駅　節子

酒殿てふ畦中の駅春惜しむ　真理子

春の風二両電車の来るカーブ　真理子

駐車場からバラ園へ向う。広場に残っている花見提灯が風に揺れ、かえって盛りを過ぎたことを知らせているようだ。実際池の回りに植えられている桜は大方散り、ところどころの八重桜のみが満開に近い。それにしても風が強く寒い。池には小波が絶えず、水鳥も少ない。この時期の季題の通り「鳥帰る」なのかもしれない。

バラ園のバラは手入れが行き届き、蕾をたくさんつけている。南斜面で風が遮られ、置かれているベンチに日が差すと暖かい。バラの蕾に囲まれて持ち込みの弁当を食べていると、猫が少し離れた所からじっと見ている。お腹が大きい。のそりと近づいて来てはじっとこちらを見ている。弁当のおかずを下におくと、静かに食べてまたのそりとどこかへ消えていった。バラ園の北側は風車のある広い芝生広場になっていて、天気のよい日には親子連れがシートを敷いて遊んでいるのだろうが、この日は人影もなく風車がよく回っているだけだ。

薔薇園をのそりと歩き孕み猫　　由紀子

中央に風車の丘や遠霞　　由紀子

池には菖蒲の芽がつんつんと伸び、端には桜の花弁が漂っている。池辺の木々は芽吹き、春の草も青々としている。それでも桜の終りはどこか淋しく、水鳥の観察小屋は池からの風が通り抜け寒い。時折散歩する人やジョギングする人とすれ違う。スポーツ施設や多目的ホールのある粕屋町総合体育館「かすやドーム」が見えてくる。横の坂道を見上げると何かスポーツ用具らしきものがあるので上ってみると、高齢者用の運動用具で脚力、腕力、バランス感覚を養う用具が広場に点在している。とりあえず一通り試してみる。傍で父と子の親子がタンポポの絮を吹いて遊んでいる。見るとはなく見ていると、子供がぱくっと絮を食べてしまい、慌てた父親が口の中に手を入れ、掻きだしている。この微笑ましい光景に、高齢者用の用具ではなく子供用のアスレチックで子供達と一緒になって遊んでいた頃を思い出す。

たんぽぽの絮吹いてみし父をまね　佳与子

堰を越え溢れる水も花の屑　節子

花筏風のとどまるひとところ　由紀子

一周は４．２キロ花の池　由紀子

鯉のひれ見えてをりけり榛の花　真理子

捨て猫の小さく鳴けり榛の花　由紀子

「かすやドーム」の休憩所で温かい缶コーヒーを飲みながら句作。左横のテーブルには子供連れの親子がお弁当を広げ、右横のテーブル二つには、グループで来ているらしい母子たちがおしゃべりしながらお弁当を食べている。窓際の暖かい所にあるテーブルでは、年配者の男女のグループがスポーツ談義を声高にしている。アリーナからもスポーツを楽しんでいるらしい声が聞こえてくる。にぎやかだが、誰にも気兼ねすることなしにゆっくりできるのがよい。アリーナ席を一回りすれば、全面張りのガラス越しに駕与丁公園のほぼ全景が見える。波立っている池向こうに立つ風車や、緑なす遠くの山、近くの山を見渡す。ガラス窓には花弁が舞う。風邪気味の体には外を歩くよりここからの句作が良いようだ。

天井に揺らめく光春の水　節子

ぼた山としるよしもなし山笑ふ　真理子

ぼた山のふたつ並びて水朧　真理子

山すそに光る風車や遠霞　佳与子

この小橋渡れば複路諸葛菜　佳与子

十句の句会。この時間になると子供連れのお母さん方も帰り支度を始め、スポーツ談義のグループもアリーナに向かい、私たちのグループのみとなる。

車を駐車しているバラ園に戻り解散。前回の食事処「かよい庵」が店を閉めてしまっていたのは残念だが、子供も高齢者も利用できるこの広い公園は、お弁当を広げて皆で語らいつつ楽しむのがいいのかもしれない。

【公園内風景：１】

【公園内風景：２】

第六十七回吟行記

平成二十二年に五月十一日（火）

参加者　佳与子　節子　聖子　光子　真理子　由紀子

火野葦平旧居（河伯洞）・若戸渡船（若松区・戸畑区）

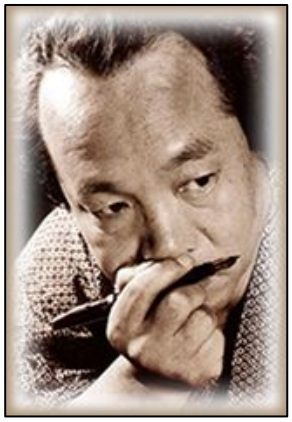
久しぶりの全員集合の吟行。五月十一日折尾駅に集合し、十時二十三分折尾発若松行きの筑豊本線若松線に乗り換える。何年か後には取り壊される予定の折尾駅は立体交差の駅舎で、現在よく利用されている鹿児島本線は二階、折尾と若松を結ぶ筑豊線が改札口前から乗降車するようになっている。駅が作られた石炭全盛時代の名残である。階段を下りて若松行きの停まっている電車に乗り込む。穏やかな天気に恵まれ、車窓より皿倉山や沿線の住宅や工場の景色を眺めながら二十分のローカル線の旅を楽しむ。

乗り換えの駅はもうすぐ桐の花　　節子

石炭を運びしレール草茂る　　節子

若松駅前の欅若葉は日差しを受けて涼しげな景をなしている。吟行予定の若松が誇る芥川作家・火野葦平旧居の「河伯洞」へ向う。「河伯洞」は駅前から高塔山方面へ数分歩いた所にあるが、周辺は昔ながらの狭い路地に住宅が連なっているので、ちょっと足を踏みいれてみる。軒先にゼラニュウムや大輪のバラなどの鉢、塀には珍しい「キングサリ」のような花が覆いかぶさるように咲いている。この路地あの路地で何か発見がありそうで、なかなか目的地に着かない。

少し火野葦平のことを書きとめておく。葦平は石炭の荷役請負業「玉井組」の長男として生まれ、十代から文学に傾倒し、早稲田大学時代には同人誌で活躍するが中退。父親の家業を助け労働運動に没頭し、その頃共産党検挙のあおりを喰って逮捕もされている。だがこの検挙をきっかけに再び文学の道を歩きはじめている。日中戦争のために応召され、昭和十三年出征中に「糞尿譚」で第六回芥川賞を受賞し、軍報道部時代に書いた「麦と兵



隊」など兵隊三部作でベストセラー作家となる。「河伯洞」は父親の玉井金五郎が葦平のためにとその印税で建てた家である。戦後この家で「花と龍」など数多くの作品を生み出し、多くの友人や文学仲間を招いている。しかし昭和三十五年一月二階の書斎で自ら命を絶っている。享年五十三才。

今年は葦平没後五十年とかで河伯洞の入口には旗が立てられている。平成八年河伯洞は市に寄贈され、平成十一年より葦平の三男夫婦が管理し、一般に公開されている。河伯洞とは河童の棲む家という意味で、葦平がこよなく河童を好んだことから名付けられたらしい。中に入るとそれがよく分かる。襖にも額にも河童の絵が溢れている。案内してくれる奥様は、多くの見学者に葦平のことを知ってもらおうと、丁寧かつ早口でよどみなく説明してくれる。広い廊下、庭、床柱、欄間、襖など今ではなかなか手に入らない贅沢な材料を使い、また台所にはあの当時には珍しい冷蔵庫が置いている。

楽しそうな新年会の仲間との写真、友人からの手紙や自ら描いた絵などを見ていると、何故自ら命をと思ってしまうが、戦争を鼓舞した作品で人気作家となった現実と戦争で多くの兵隊が命を落とした現実との狭間での葛藤は他人の知り得ない闇となって奥底にいつもあったのだろう。

二階の書斎の机にはバラが飾られ、少し開かれた裏窓から高塔山の若葉が見える。駅近くにはマンションが建ち並び、当時と景色が変わったであろうが、葦平の残したものがぎっしりとつまった旧居で、黒板に残された文字や箪笥に掛けられた黒羽織などを見ていると、ひょっこり葦平が出てきそうである。ちょうど昼時でパン屋が配達に来ている。管理人さん用の配達だが、誰でも購入してもよいとかで、メロンパンなど買って部屋のテーブルで食べる。お茶まで出していただき恐縮至極。

葦平の町でありけりバラの花　　真理子

葦平の机にバラとラムネ瓶　　真理子

夏の風葦平旧居吹き抜けて　節子

葦平の高塔山や若葉風　聖子

若葉風パン屋来てゐる葦平居　由紀子

河伯堂からまた路地を抜け商店街を通る。いつ出来たのか、レトロ調な手押しポンプがいくつも設置されている。何度も押してみると水が出る。飾りだけではないようだ。昔栄えた所はどこもシャッター通りになり寂れているが、昔の活気は取り戻せないもののまだ少し元気が残っているようだ。蕎麦屋「藪」にて昼食。ネットで探しておいた蕎麦屋とは違うが、地元の人に「蕎麦屋は？」と聞いて教えてもらった店だけに次から次にお客が入ってくる。若者、サラリーマン、労働者、家族連れなどで満席に近い。

店を出て海岸通りへ向う。「ごんぞう小屋」を見学し、近くに停泊している巡視艇をベンチに座って眺める。若戸大橋と対岸の戸畑地区の工場やマンション、その向こうに見える皿倉山はいつも見慣れた景色ながら、山と海に恵まれた北九州の良き一面を見る思いがする。目の前の洞海湾をタンカーなど大小の船が通り過ぎる。

ハローワークなんじゃもんじゃのバス通り　節子

初夏やベンチのどれも海へ向き　佳与子

煤けたるビル窓のなりべゴニアに　真理子

石炭で栄へし港つばくらめ　真理子

ゆく船の吃水線高き夏霞　光子

聳え立つ朱の大橋の卯波かな　聖子

鉄壁のごときタンカー卯波切る　真理子

この辺りの観光のシンボル的な建物「旧古河鉱業若松ビル」は火曜日で休館。隣の「石炭会館」の一階は高級クロワッサンの店が入り、横の青蔦

の小さな建物には雑貨店が入っている。若松のレトロな町並み作りは、門司とは比べ物にはならないが、そこそこに成功しているのではないだろうか。若戸渡船に乗り込み対岸の戸畑へ向う。乗船時間三分の渡船は自転車や乳母車なども乗る生活船。車やバスで大橋を渡ることのほうが多いが、生活の匂いのする渡船が現役で往来している北九州も捨てたもんじゃないと思う。

ご乗船地なる碑花ポピー

佳与子

戸畑の渡し場の近くの恵比須神社に寄る。隣に「御乗船地碑」の案内板。一九九〇年十月、当時の皇太子殿下(後の大正天皇)が、小倉十二師団の演習をご覧の後、船で八幡方面を視察された時の「乗船地」を記念して建てられた碑とある。ゆっくり歩くと思いがけない発見がある。戸畑駅の裏から表に出る通路を抜けて、近くの「ウェルとばた」の休憩所で句会。帰りに京都行きの切符を購入して解散。

【「河伯洞」風景：１】

【「河伯洞」風景：２】

【若戸渡船場】

第六十八回吟行記

平成二十二年六月吉日

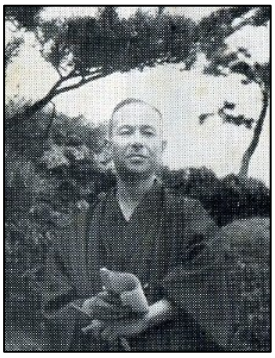
北九州と俳句

何の知識もなく始めた俳句は、かれこれ二十年となる。自分でもびっくりだが、ふと思うに、句材として詠む自分の住んでいる北九州の俳句界のことをよく知らない。著名な杉田久女、橋本多佳子を含めた北九州の大きな俳句の流れがあり、あちらこちらで俳句大会が催されているにもかかわらず、わずかな結社を知るのみである。

数年前小倉城近くの勝山公園に「文学館」ができ、北九州所縁の文人達の紹介が作品の展示とともにされている。「松本清張館」は別にあるので、清張を除いた火野葦平、森鴎外、岩下俊作、竹下夢二、林芙美子、杉田久女などなどである。その中から俳句に関することを、手元にある資料から自分なりに北九州の俳句界についてまとめてみようと思う。

大正から昭和初期、虚子を福岡に招き大きな俳句大会が行なわれている。河野静雲、吉岡禅寺洞ら著名な俳人が出席し、女性は久女、多佳子、しづの女たちほんのわずかな人数であったらしい。当時は男性中心の俳句界で吉岡禅寺洞が大正七年に福岡市で「天の川」を創刊し、その後門司新報で俳句欄を設け北九州俳句会に刺激を与えている。高浜虚子に師事し、福岡北九州の俳句界の道筋をつけた三氏を書き留めておく。

清原枵童（きよはら　かいどう）（明治十五年～昭和二十三年）
博多毎日新聞に勤め、同紙俳壇選者。
大正十三年「木犀」創刊。
昭和五年朝鮮に渡り　朝鮮俳壇で活躍。
昭和十三年福岡に帰り、昭和二十二年
八幡で「木の実」創刊。
昭和二十三年没



河野静雲（こうの　せいうん）（明治二十年～昭和四十九年）僧侶。

昭和五年　枳童より「木犀」を継ぐ。

「ホトトギス」同人。

昭和十六年福岡県下五誌合併により生れた「冬野」創刊主宰。

太宰府に花鳥山仏心寺を建て住職となる。

西日本文化賞受賞

吉岡禅寺洞（よしおか　ぜんじどう）（明治二十二年～昭和三十六年）

大正七年「天の川」創刊のち主宰。

昭和四年「ホトトギス」同人となるが新興俳句運動にはいり、十一年除名。

戦後、口語俳句協会会長

吉岡禅寺洞の「天の川」の編集に携わっていたのが、当時九大の医局にいた横山白虹である。その後彼は小倉北区に外科病院を開業し、また北九州市合併前の小倉市議会の議長を務めるなど北九州のリーダー的存在として活躍する。俳句に関しても、昭和十二年「自鳴鐘」（とけい）を創刊し、戦争時の休刊を経て、昭和二十三年復刊。呼び名を「じめいしょう」と変え、俳句活動に打ち込む。「自鳴鐘」の現在の編集長は白虹の四女・寺井谷子氏である。

清原枳童の創刊した「木の実」は枳童没後、河野静雲が代表を継ぎ、その後山鹿桃郊、向野楠葉（折尾にて眼科医院）、河野頼人（北九大名誉教授）と引き継がれるが、平成十九年七〇一号をもって、河野氏の健康上の理由で終刊となる。北九州の俳壇について調べが不十分で、いくつかの結社があり、伝統系か現代系かくらいしか分からないが、北九州のホトトギス系俳誌の本流は「木の実」と言える。それが終刊となったのは寂しい限りであるが、主宰が変われば俳風も変わるのは当然のことで、同じ俳誌を継承していくことは難しいと言わざるを得ない。

昭和三十七年北九州俳句協会が結成される。その時会長を務めたのが横山白虹。自らは現代俳句協会会長を六期務めているが、北九州俳句協会の会長として伝統系も現代系もまとめあげ、その功績ともいえる句碑が市内に六基立っている。

参考までに北九州所縁の俳人たちの年譜を句と共に記しておく。

大正　八年・・・・花衣ぬぐや纏はる紐いろいろ　　久女
大正　九年・・・・短夜や乳ぜる泣く子を須可捨焉乎　　しづの女
大正　十一年・・・虚子を迎えての句会が櫓山荘で開かれる。
　虚子四十九歳、
　久女三十一歳、多佳子二十三歳（俳句開眼）
　落椿投げて暖炉の火の上に　　虚子
大正　十四年・・・多佳子、久女の勧めで「ホトトギス」に投句、
　禅寺洞の「天の川」に投句
昭和　二年・・・白虹はじめて山口誓子に会い、その選評に深く感銘。
　以後親交続く。
　若松句会にて　七月の青嶺まぢかく熔鉱炉　　誓子
昭和　六年・・・久女句　「研して山ほととぎすほしいまま」が金賞
昭和　十年・・・山口誓子「ホトトギス」離脱。多佳子、誓子に師事
昭和　十一年・・・久女、禅寺洞、日野草城「ホトトギス」除名
昭和　十二年・・・白虹「自鳴鐘」（とけい）創刊
昭和二十一年・・・久女没　五十六歳
昭和二十二年・・・「木の実」創刊
昭和二十三年・・・白虹「自鳴鐘」（じめいしょう）創刊。
　山口誓子「天狼」創刊。多佳子「天狼」同人。
昭和三十三年・・・白虹、妻房子と共に「天狼」同人
昭和三十四年・・・虚子没　八十五歳
昭和三十六年・・・禅寺洞没　七十一歳
昭和三十八年・・・多佳子没　六十四歳
昭和三十九年・・・野見山朱鳥師系　八幡にて児玉南草氏「地平」創刊
昭和五十八年・・・白虹没　八十四歳
平成　六年・・・誓子没　九十三歳
平成　十九年・・・「木の実」終刊

現在北九州における結社は正確には知らない。「北九州芸術祭俳句大会」が開催された折、協賛結社として次の名前が挙がっていた。【青嶺・色鳥・風俳句通信・自鳴鐘・北九州雪解・九州俳句・金属地帯・山茶花・天籟通信・橋】 俳句結社だけなのか愛好者グループも入ってのかわからないが、俳句愛好者が増え、普通の主婦が気軽に門に入って行くことが出来るほど広がっていることは確かで、芸術論を戦わせたであろう虚子や秋桜子の時代は遥か遠くである。

俳句愛好者の増加に伴い、北九州市も率先して「全国女性俳句大会」や「北九州芸術祭俳句大会」「各区の総合文化祭」その他にも俳句大会が開催されている。結社を問わず誰でも参加できる大会が多くあることは、最初に北九州の俳句界を束ねた横山白虹の広い人脈によるものでないだろうか。

【高炉台公園】

【畑観音】

横山白虹の句碑

雲霏々と舷梯のぼる眸ぬれたり　（高炉台公園）
瀧浴びし貌人間の眼をひらく　（畑観音）・・・白虹の代表作
藤棚の下の浄土のこみあへり　（吉祥寺境内）
夕桜折らんと白きのど見する　（足立山麓　妙見神社境内）
霧青し双手を人に差しのばす　（小倉城内）
和布刈る神の五百段ぬれてくらし　（門司港駅前）

こうして先人たちの俳句を書き記していくと、自分の句の世界の小ささを痛感させられる。中身ができていなければ吐き出すことも出来ない。我が身を磨くのみである。（でっきるかなーーー？）

【吉祥寺境内】

【足立山麓　妙見神社境内】

【横山白虹展のパンフレットと白虹】

【小倉城内】

【門司港駅前】

禪寺洞句碑の拡大

【吉岡禪寺洞の句碑：福岡の今泉公園内】

【橋本多佳子と櫓山荘】

【「足袋つぐやノラともならず教師妻」の句をイメージした人形と杉田久女】

第六十九回吟行記

平成二十二年七月十三日（火）～十五日（木）
参加者　佳与子・節子・聖子・温子・真理子
光子・千種・裕子・典子・由紀子

志賀島・追い山笠吟行

関東貝寄風のメンバーから「今年こそ追い山笠を見たい」と連絡を受けた佳与子さんから相談されたのが松過ぎの一月中旬。七月の追い山笠には、まだまだ日にちのあることだが宿の確保だけは早いほうがよい。以前追い山笠の宿探しに苦労した経験から、取り合えずのスケジュールを作り、宿を決める。例年追い山笠は七月十五日未明、梅雨末期の大雨か空梅雨の蒸し暑さの中で行なわれる。ましてや徹夜か半徹夜状態の見物である。年齢相応の無理のないスケジュールを心掛ける。

皆でのんびりできる所ということで志賀島国民休暇村を候補に上げる。国民休暇村は六ヶ月前から予約受付なので、それに合わせて節子さんが予約をいれる。追い山笠の常宿になりつつある「鹿島本館」は、今年の料金設定は今からとの返事だったが、佳与子さんが何度か電話を入れ、予約を済ましておく。

七月十三日十一時過ぎ、佳与子、節子、真理子、由紀子の九州組は早々と博多駅前に集合し、福岡空港から地下鉄で来る温子さん、裕子さん、典子さんを待つ。梅雨前線が活発化し、福岡にも大雨洪水警報が出ている。雨の飾り山笠の前で無事合流。五月末の京都以来だから二ヶ月半ぶりの再会である。

待ち合わす改札口の飾山笠　温子

高々と飾山笠雨に立つ　裕子

列車待つ男山笠長法被　節子

すぐにタクシーに乗り込み博多埠頭へ向う。埠頭からは志賀島・玄海島、壱岐・対馬、五島行きなど市営渡船や九州郵船などのフェリーが発着する。埠頭内の商業施設「ベイサイドプレイス博多」は福岡の観光名所でもあるが、大雨の埠頭には人影はまばらである。昼食後、十三時五十分発の志賀島行き渡船に乗り込む。ほぼ貸切状態。窓の景色は博多港の倉庫群から壇一雄所縁の能古島や地震復興の玄海島などが見え始めるが、雨脚は強く、

渡船は川から流れてきた流木や木の枝や生活ゴミなどが浮いている中を西戸崎など寄港しながらゆっくり志賀島の桟橋に着岸する。

乗降の客なき埠頭梅雨深し　佳与子

梅雨濁る渡船の波のうねりかな　裕子

地震の島あたりより海霧薄れきて　節子

島渡船出水の芥分けて着き　由紀子

岸壁に葛らしきあの茂りやう　温子

防人の島にバス待つ花木斛　典子

左右より茂りかぶさる島の道　裕子

流木のあらはに昏し梅雨の浜　真理子

休暇村の送迎バスに乗り込む。ＪＲ西戸崎駅からの乗客も乗せバスはほぼ満席。休暇村は島の反対側の突端にあるので、バスは島の半周を走る。夏草や木々の茂る海沿いの道は、博多の街を遠くに見ながら、若布のとれる岩場や「金印公園」の入口を過ぎて、玄海灘の広がる休暇村に着く。敷地内にある「しかのしま資料館」で、昔の漁具、農具、生活用具の展示品、また金印発掘に関する文書や絵図、また島の万葉歌碑の写真や説明文をみる。金印はレプリカで、国宝の本物は福岡市博物館に展示されている。海岸線まで下りて行き、岩場で海胆を採っている人を見たり、小さな鳥居のある沖津宮近くまで歩くなど、それぞれに吟行する。

海胆を採る岩場に梅雨の波強し　真理子

七月の大潮の日に蛸を釣る　典子

梅雨の海半身沈めて貝を採る　佳与子

梅雨傘を上げて一礼沖津宮　由紀子

梅雨傘の一人二人と岩場へと　佳与子

万葉の島の碑月見草　温子

ずぶぬれの猫とぼとぼと島の梅雨　節子

また沖の閉ざされてきし梅雨の浜　裕子

夕食会場からも海が見下ろせる。玄界灘に沈む夕日が美しいのだが、雨脚はだんだん激しくなり沖は見えない。料理は烏賊の活き作りの大皿が並

び、これでもかと言うほど次から次と運ばれてくる。料理が宿側の手違いで若干違ったが、その分デザートなど別腹にも入りきれないほどサービスされる。十句出句。

はまごうの花に雨脚強まりて　　裕子

さきほどの島無きごとくさみだるる　　裕子

沖昏く島うすれゆく梅雨の浜　　由紀子

遠雷の低き唸りの島泊まり　　真理子

十四日小雨の中、九時四十五分発の送迎バスで志賀島渡船の発着港へ。

コインロッカーに荷物は入りきれないので事務所に置かせていただいて、近くの「志賀海神社」へ歩いて行く。ここは万葉の昔から「海神の総本社」として篤く信仰されている。鳥居の横にはお浄めの砂が置かれ、身を浄めてから参拝する。境内の鹿角堂（ろっかくどう）が目を引く。格子窓から見える鹿の角は埃をかぶって積み上げられている。神功皇后が対馬にて鹿狩りをされ、その角を多数奉納されたことが起源とされる。　鹿角は祈願成就の御礼に奉納され、中にはウキを付けて海に流されて来たものを漁師が拾い上げ奉納したものなどがある。現在では一万本以上あるらしい。亀の形の「亀石」も祀られ、そこからは玄海灘と志賀島とつながる海の中道の松原や遊園地の観覧車、その先の福津の浜が見渡せる。辺りを出航の時間まで吟行する。浜には客らしい人影はなく、海開きの神事の跡が残されたままになっている。漁港に泊めている舟にも人の出入りはない。

外海に出水の濁り帯をなし　由紀子

鹿角庫案内板の梅雨湿る　典子

だんご虫でんでん虫をよけて這う　節子

海開神事あとらし砂浜に　佳与子

夏草に漁網干されて志賀港　典子

広げ干す魚網を浜の夏草に　佳与子

ハチクマの来るという山夏の霧　温子

十一時三十五分発の渡船に乗る。渡船内のテレビでは福岡県内の大雨による避難勧告のテロップが流れている。島に避難していたかのごとく怖い思いもせず、楽しい一夜をすごせたのは何よりである。寄港の西戸崎から年配の法被姿の男性が乗ってくる。いよいよ山笠の街が近づいて来る。雨はほとんど止んでいるので、避難勧告のニュースが信じ難いが、山の辺りの黒い雲や博多港の茶色の水に大雨の跡を見る。

島渡船山笠の男と乗り合わす　裕子

警戒の出水の町に帰港して　温子

追い山笠を明日に控えし町につく　真理子

埠頭からすぐにタクシーで「鹿島本館」に行く。すでに九州朝日放送のクルー達が追い山笠放送の会議を開いている。邪魔にならないように、フロントのすぐ横の階段の突き当たりが我々の部屋になっている。櫛田神社の楼門が見える宿は他にない。昼食は傍の蕎麦屋の二階。大雨でＪＲ高速バスが動かず、ＪＲも大幅に遅れたので心配したが、無事光子さん到着。聖子さんや朝飛行機で羽田を発った千種さんとも合流でき、揃って櫛田神社に参拝する。

天辺の幣に風あり飾山笠　千種

デニム地の夏帽子にて長法被　聖子

水頼む願ひ小声に山笠法被　聖子

クレーン車に大型カメラ祭前　　節子

清道旗向けてカメラの山笠準備　　真理子

梅天へ据ゑる神鼓の三つ巴　　千種

準備中の追い山笠会場を見てから東長寺方面へ歩いていく。この辺りは追い山笠コースでもあり、広い通りから一歩中に入ると狭い通りとなり、道筋の長屋のような狭い玄関口に小さく「山笠総代」の名札が掛けていたり、舁き縄が手摺に干されていたり、静かな中に山笠の街を実感する。締め込みの男衆があちらこちらから、各々の詰め所に集まり初めている。中州川端の賑やかな通りから追い山笠コースの「廻り止め」となるリバレインまで、飾り山笠や舁き山笠を見て回る。リバレイン横の「大黒流れ」は十七時に流れ舁きの出陣をするというので近くに陣取る。この時間になるとどの通りにも流れ舁きが始まっている。オッショイ　オッショイの声に街が沸き立つ。熱気に雨は降らずにいる。

四、五本の舁き縄干され祭路地　　佳与子

川風の運ぶ神酒の香祭町　　千種

じりじりと熱気昂ぶる山笠の町　　聖子

追い山笠の時計係を三世代　　聖子

祭町勢ひの水の角々に　　典子

山笠を舁く地下足袋に先ず勢い水　　光子

息合うて山笠の舁き手の替わり際　　由紀子

舁き縄とお汐井枡を山笠の家　　光子

飛びだしてきさうに山笠の飾りかな　　裕子

続々と舁き手集まり流れ山笠　　節子

舁き縄を締め込みに挿し山笠男　　由紀子

交代の山笠の舁き縄振りあげて　　温子

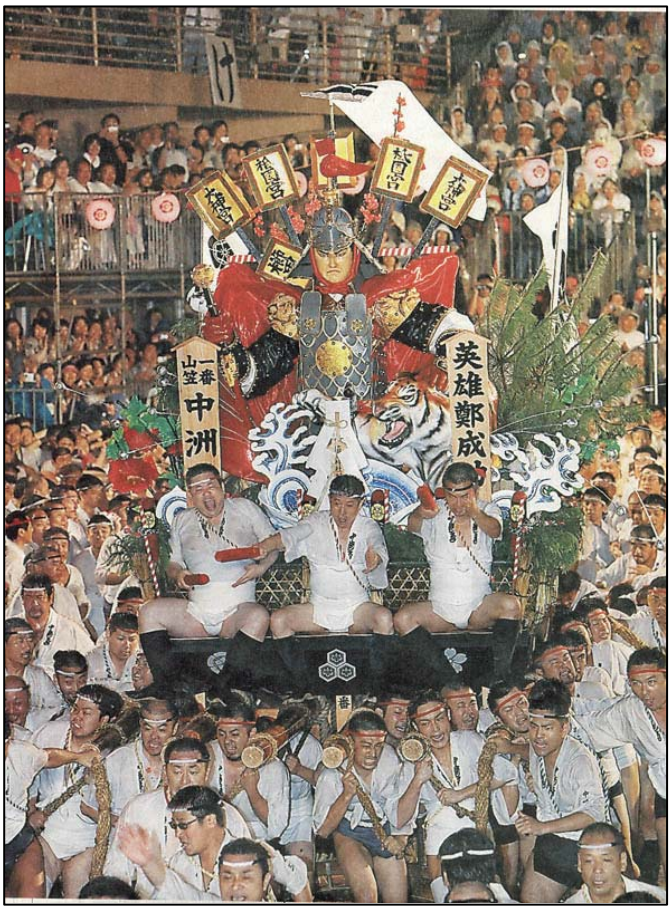
山笠去りて水の匂ひの残りけり　　千種

博多座裏の「吉一」にて夕食。全員揃ってまずビール。美味しくいただいた後宿に戻って十句の句会。

午前三時起床。雨音に起き、窓からみると土砂降りである。止みそうにないので全員合羽を着て、すぐ楼門前の席を陣取る。例年のように後ろから横から押されつつ開始時間まで待つのだが、雨が合羽の中の服を濡らすほど降り込む。隣の人の傘から滴る雨には参ってしまう。中には通り抜ける様にして居座る輩もいて腹立つこともあるが、辛抱、辛抱。

ようやく四時五十九分に近づく。雨音に放送の声が混じり、静まりかえることはなかったが、一番山笠の祝い唄を聞き、東長寺の敬拝を見て、舁き山笠を追いかける。廻り止めを抜けていく山笠をもう少し見ればよかったが、一度道路に出たら見物列に入れないほどの人の山。こう行けば良かったなど反省することもあるが、大方見所を押さえて見物する。

櫛田神社の「鎮め能」をみて宿に引き上げる。十四時裕子さんは東京へ戻り、佳与子、由紀子は自宅へ。千種さんらは二日市、太宰府へ向い解散。



【一番山笠「中州流」】

祭宿部屋一杯に布団敷く　典子

冷房に祭座布団しんと冷え　聖子

人の声高まり夜半の祭宿　真理子

どしゃぶりの雨となりたる追山笠に　裕子

抱かれゐる祭法被の子も雨に　真理子

指先の雨にふやけて山笠を見る　典子

路地へ入る山笠の勢い圧し縮め　千種

御神燈雨に火虫の飛び止まず　千種

梅雨か汗合羽の中の服濡らし　由紀子

おしょいの声を追いかけ山笠の町　温子

追いかけて先回りして山笠を見る　光子

山笠の直会朝のビル街に　節子

白む空丁寧に山笠解き始む　節子

境内に残る轍も祭あと　佳与子

山笠果てし鎮めの能の大鼓　光子

何事も無かったように祭後　典子

祭果て桟敷に残る泥の跡　裕子

大雨の中の追い山笠見物になったが、これもまた良しで名句がたくさんできました。

【「流れ舁き」の先走り】

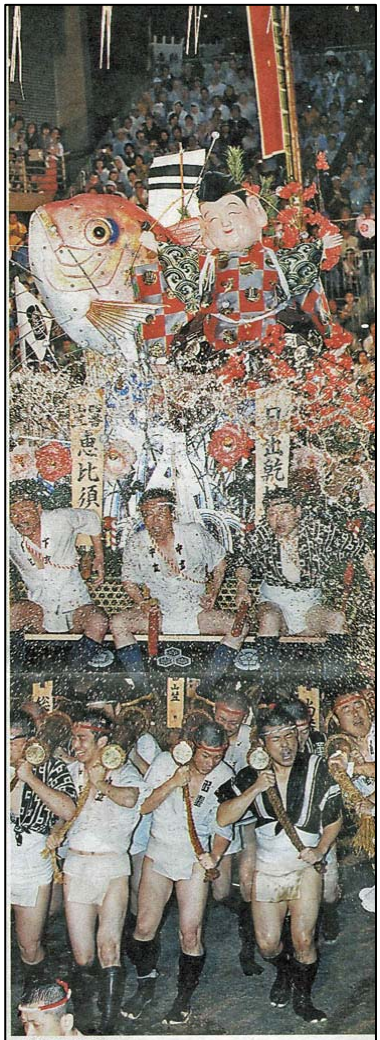
千代流

西流

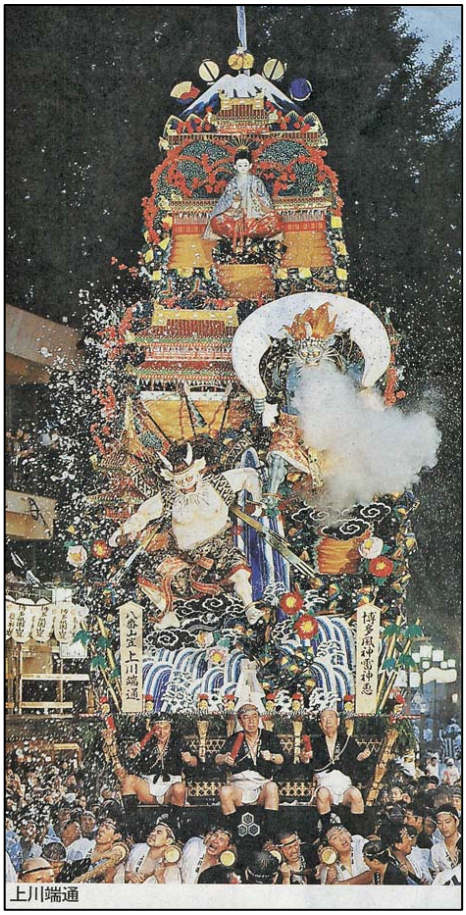
【追い山笠：１】

土居流

大黒流



恵比須流


上川端通

七番山笠 東
東流

【追い山笠：２】

中洲流 33分35秒
西流 31分35秒
千代流 30分39秒
恵比須流 31分53秒
土居流 31分39秒
大黒流 30分39秒
東流 29分37秒

第七十回吟行記

平成二十二年八月六日（金）

参加者　節子　光子　真理子　由紀子

神湊・「魚屋（うおや）」本店

七月の山笠豪雨が懐かしいほどの残暑が続き、「熱中症」関連のニュースが連日のようにテレビ、新聞で取り上げられている。八月の吟行を皆の都合のよい六日に決めたものの、この暑さに立ち向かう元気はなく、一所でのんびりとくつろげる場所がいい。閃いたのが、ＪＲ九州の「日帰りの湯」のパンフレットに載っている「魚屋（うおや）本店」。福岡市と北九州市のちょうど中間地点にある玄界灘を見渡せる神湊（こうのみなと）の老舗の割烹旅館である。ＪＲ鹿児島本線「東郷駅」への送迎バス付き、食事に温泉と、若干俳句吟行から遠のく感じがするが、何かと忙しくなる盆前の主婦たちを疲れさせてはいけないと決定する。

八月六日、東郷駅北口　午前十一時発の送迎バスに間に合うように集合する。いつも利用する鹿児島本線なので、ついＩＣカードを使ってしまったが、親切な駅員はにこやかに企画切符に切り替えの対応をしてくれる。このうっかりミスは私一人ではなかった。異常な暑さのせいかもしれない。

送迎バスには私たちグループ四人のみ。運転手は「途中宗像大社でも寄りましょうか？」と話しかけてくる。何度も行っている大社だが、真夏の大社吟行も良しとお願いする。釣川に沿って青田や夏野菜の畑が広がり、時折白鷺が飛び立っていく。バスはこんもりとした森へと曲がり、大社の境内に一番近い所に横付けしてくれる。敷詰められた砂利を踏む音のみで、境内は深閑としている。本殿横の「ご神木の楢」が枝を広げ、程よい木陰をつくっているので、しばらく佇む。

青蘆の川に沿いたる社かな　　真理子

客四人乗せてバス行く青田道　　光子

人気なき広き境内炎天に　　節子

神木の楢の大樹の蔭涼し　　真理子

夏の川満々として玄海へ　　節子

日傘差し大豆畑の野良仕事　　節子

再び乗り込んだバスは海辺に向って走り出す。運転手は話好きらしく、どこから来たのかなど聞いてくるが、遠方からの客ではないと知ると、この辺りの案内は控えはじめる。大社から約十分「魚屋本店」に到着。

玄関口は狭いが、水打ちされた庭には山頭火の句碑が建ち、奥の建物は団体客も受け入れられるとあって広々としている。広いロビーの真正面の大きな窓いっぱいに海が見える。仲居さんと女将にしては無愛想な年配の女性が、土産物の並んだフロントの奥から出てきて、ＪＲ発券の食事券を受け取り、部屋へと案内してくれる。老舗旅館だけあって大広間は舞台付きの百二十畳。長い廊下に大小の部屋が玄界灘に向いている。

宿の玄関口の山頭火句碑「晴れるほど　曇るほどに　波のたわむれ」（昭和十五年）の句が浮かぶ。

二階の部屋は本間十畳に廊下付きの純和風で、冷房に汗がすーっと引いていく。さっそく料理が運ばれ、鯵の活き作りの大皿が置かれる。全般的に少し濃いめの味付けだったが、青々した大海原を眺めながら美味しくいただく。

地島（じのしま）、大島などが目の前に浮かんでいる。浜では親子連れが波打ち際で泳ぎ、若いカップルは堤防の下の蔭に座り、沖を眺めている。真下の白い砂浜は、この旅館のプライベートビーチのように歩いてすぐ下りられるようになっている。

開け放すロビー潮の香夏の風　節子

したたかに水打ち昼の料理店　真理子

釣宿に巣のあるらしく夏燕　光子

普段着のままに潮浴親子かな　光子

打ち寄せし流木一つ海桐の実へ　由紀子

磯渡る橋のかかりて雲の峰　光子

この企画切符は料理に風呂付きなので、さっそく用意された旅館の浴衣をもって大浴場へ。客はこの四人のみなので、いたってのんびりできるが、時間の制約があるので汗を洗いながしたのみで上る。

部屋から見える地島には以前船で渡ったことがあるが、漁港の近くに家が連なり、小さな小学校と椿の花が印象的だった。大島は漁師の島でもあるが、宗像大社の中津宮が祀られている島でもあり、その沖に浮かぶ沖ノ島は沖津宮が祀られている。特に沖ノ島は神職のみが居るだけで、女人禁制の神の島である。

夏の潮日の傾きに色を変え　由紀子

神域の島よく見えて秋立ちぬ　真理子

二時半には送迎バスが出発するので、少し部屋で句作をして帰り支度をする。フロントで十月一日の「みあれ祭」について尋ねると、大漁旗を掲げた船団の海上パレードを目の前で見ることができるというので、さっそく予約を入れる。今回の収穫は一度は見たいと思っていた「みあれ祭」の予約かもしれない。

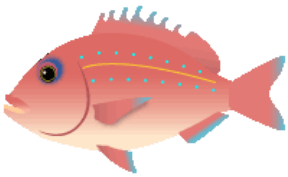
バスは旅館と提携しているのか、近くの魚屋に寄る。ここで地物の干物を買い駅まで送ってもらう。東郷駅のすぐ横の喫茶店にて句会。カウンター席と三～四のテーブル席だけの小さな喫茶店に常連客らしい二人が女店主とおしゃべりしている。テーブルを二つ寄せて句作、句会。常連客お薦めの水出しコーヒーのかき氷がめちゃめちゃ美味しい。

真っ青な空に、昼すぎからは幾つも入道雲が立ち上がっていたが、帰りの電車で福岡方面は雨になったらしい。恵みのお湿りである。

佳与子さんは大事をとって今回お休みとなったが、みあれ祭には是非参加できることを願っている。

【神湊の海岸よりの眺望】

【「魚屋（うおや）本店】



第七十一回吟行記

平成二十二年九月十六日（木）

参加者　佳与子　節子　光子　由紀子

高見神社・金毘羅池周辺

今年の夏は異常な暑さで、立秋を過ぎてからラストスパートをかけるように全国各地で最高気温の記録更新をしている。九月中旬の十六日も三十度の予報。真夏のような暑さだが、以前より幾分風が涼しく感じられる。それでも炎天下を吟行することを避け、高見神社と金毘羅池周辺を吟行であれば佳与子さんも参加しやすいだろうと、高見のスーパー「スピナ」駐車場に集合と決める。

九月十六日十時半、八幡駅で節子さんを車に乗せ高見に向う。すでに光子さんと佳与子さんは「スピナ」に来ており、予定通り十一時吟行開始。せせらぎと花木に囲まれた高見の住宅街をゆっくり抜ける。広場では幼稚園児たちが運動会の練習をしている。住宅街の中は、あまり人が行き交うことはなく、時折車の出入りがあるのみである。高見地区には市長公舎が建っていたが、民主党の元衆議院議員の北橋市長は「税金の無駄遣い」を理由に公舎に入らぬまま取り壊されている。それを見ながら脇参道に向う。木槿や百日紅の花が咲き、実むらさきは僅かに色を付け始めている。通りの一角に藤袴の一葉があり、アサギマダラの乱舞をみた覚えがあるが、時期が一ヶ月早いせいもあって藤袴があまり見当たらない。。

朝涼の広場園児の遊戯会　　由紀子

参道につづく小流れ実むらさき　　由紀子

境内に参拝者はいない。見慣れた景色ではあるが、山を背に大樹に囲まれた神殿は神聖な空気が流れている。少しひんやりとする僅かな風の中でお参りを済ませる。しばらくすると禰宜らしき人がでてきて池の掃除なのか水替えなのか、鯉の泳ぐ池で作業を始める。十月十一月の秋の大祭や七五三の案内のチラシが置かれているので、その前の準備かもしれない。

新涼の風神殿の奥より来　　光子

かって高見の桜の名所だった名残の広場に行く。薄紅葉というか夏枯れとういか、葉っぱは黄色に色づいているものもある。上の山道を上れば北

九州市立美術館に通じているが、道沿いに咲く臭木の花や仙人草の花に揚羽蝶が通り過ぎるのを見ながらしばらく句作。模様のわずかに違う黒い揚羽蝶に「カラスアゲハ」「ジャコウアゲハ」「クロアゲハ」の名前が挙がるが、詳しくは分からない。スカートで吟行した人の足に襲う藪蚊に長く居られず駐車場に戻り、金毘羅池に向う。車で五分。

美術館臭木の花の咲き残り　光子

鉦叩通り過ぎれば鳴きだして　節子

北九州総合体育館の前に広がる金毘羅池の周辺もまた散歩コースとして整備されている。池の浮き島は柳が池面に垂れ蘆が生茂っている。そこから鴨が姿をみせ、青鷺が何かを狙って身じろぎ一つせず立っている。所々に植えている紅萩が目に付く。西側にある小高い金毘羅山は歩いても、車でも気軽に行くことのできる神社で、春になると頂上までの渦巻き状の道に沿って桜が淡い色をつける。上る元気は、この暑さでは出て来ない。大池の噴水が噴き上げはじめる。人感センサーのように人影を感知すると噴きはじめるのかと思う。堤の上にある小さな池には蘆や蒲が色あせて茂っている。浮き草も多く、池の半分も水が見えないが小さな鷸が二羽三羽と水草の間から姿を現し目を楽しませてくれる。

鷸の子の尾羽少しく立てゆけり　光子

水に浮く草一本に二羽の鷸　由紀子

池の辺に小さな祠赤のまま　佳与子

赤蜻蛉国境石に止まりては　由紀子

総合体育館と美術館の中間地点にある鞘ヶ谷の和食の店「魚蔵」にて昼食。その後近くの教会のあるレストランにて句作、句会。真っ白な外観、内装も白を基調にしたレストランは、メインの通りから少し中に入るので、分かりにくいが店内のアレンジメントフラワ

ーや単色のクッションなどが良く映え、全面総ガラスの窓から先ほどの金毘羅山の鳥居がくっきり見える。庭にはレストランで使われるハーブがたくさん植えられ微かに匂っている。出入り自由の芝生の庭先に風見鶏のある教会がこじんまりとあり、爽やかな風が吹いている。

山頂に鳥居の見えて秋の晴　　由紀子

参観は自由教会花むくげ　　佳与子

ここから眺める空は秋の空、秋の雲で、お彼岸を過ぎれば異常な暑さも落ち着くだろう。十月の「みあれ祭」での再会を約束して解散する。

【金比羅池より北九州市立体育館を望む】

【高見の広場から皿倉山を望む】

【金比羅池の青鷺】

【句会場のレストランと庭】

第七十二回吟行記

平成二十二年十月一日（金）

参加者　節子　光子　由紀子

宗像大社・みあれ祭（福津市）

八月句会に神湊の料理旅館「魚屋本館」を利用した。その時、ロビーに貼っていた「みあれ祭」の写真やポスターに釘付けになり一度見学したいという話になった。宿の人に聞くと、「このロビーから一番よく見ることができます。目の前の海を何百隻もの魚船が集まり、とても勇壮なお祭りですよ」という。話がトントンと進み、その場で六人全員の宿泊予約。諸事情で当日三人となったが、念願の「みあれ祭」を見学することができた。

宗像大社・・・天照大神の神勅によって降臨された三女神を祀る

長女・・・沖津宮、沖ノ島（神湊より海上六十ｋｍの孤島）
次女・・・中津宮、大島（神湊より海上八ｋｍ）
三女・・・辺津宮、通称宗像大社と呼ばれている総社。

この三宮を総称して「宗像大社」という。ほとんどの祭祀は総社の辺津宮で行なわれるが、秋季大祭では、沖津宮と中津宮の神を船で迎えに行き三日間神事を執り行う。「みあれ祭」とは、この神迎えの神事である。一年に一度三女の辺津宮の姫が、失礼のないように姉の沖津宮や中津宮の姫をお迎えする船を出させるのである。

十月一日早朝、海岸沿いに建つ宿の窓のカーテンを開けると、まっ平らな穏やかな海が広がり、東の岬から続いているなだらかな山々に靄が立ちのぼっている。薄紫がかった山が明るくなり、やがて眩しい太陽が上りはじめる。昨夜も月が煌々と海を照らしていた。目の前の海に、これから神輿を乗せた船が渡ると思うと、静けさも光も神々しく思える。

岬山に月の上りし夜更けかな　　光子

山襞の靄に朝日や秋祭　　由紀子

朝食前に海岸を歩いてみる。散歩している地元のお婆さん、宿泊客らしい下駄履きの女性のグループやカメラを首から下げた男性が海辺を歩いている。ゴムボートで釣りをするために海に出ようとしている男性が話しかけてくる。みあれ祭のことを聞くと、この辺りがやっぱり一番間近で見物できるという。西側の神湊の港から迎えの船が大島へ向い、神輿を乗せ

た後、目の前の地島や東側の鐘崎港の浦々から集まる船と一緒にこの辺りを旋回し、神湊の港に戻って上陸する。他の船は、神輿船（御座船）が無事神湊へ入港するのを見て、自分の港へと戻っていくらしい。

海岸に出て見るもよし、宿のベランダから見るもよしなので、人の混み具合次第ということにして一旦宿に戻る。昨夜の宿泊客は少なかったが、玄関にはずらりと何々様御一行の札が並んでいる。祭り後の宿泊か昼食なのだろう。朝食は品数が多く食べきれないが、「魚屋」名物の鯛茶漬けが美味しい。

朝月に開始の花火浦祭

由紀子

開始の花火が打ち上げられる。目の前の海岸はさほど混んではいないので潮風に吹かれながら見物することにする。岩場に作られた小さな橋の辺りに陣取り開始を待つ。海に突き出した岩場に三脚を立てている老人もいる。後ろの宿を見ると、屋上にカメラを持っている人がずらりと並び、ロビーにも人が並んでいる。

歩いて行くには遠いが、西側の港辺りの方に大勢の人が集まっている。神事を見るには港の方がよかったようだ。迎えの船が防波堤から出て行き、御付きの船も次々に大島へ向っている。沖津宮の神輿は、前日に大島の中津宮へ入られているらしく、当日は一緒に大島から出発する。

神島へ向ふ船団秋の潮

節子

九時三十分。いよいよ大島港から一斉に船が動きだす。神輿の乗った御座船（ござふね）を囲む沖合いの船団は、白い水平線のように帯をなし、地島の向こう側（沖側）を通り鐘崎港沖へと向う。取材のヘリコプターが

四機上空を飛んでいる。陸から見る神湊～大島～地島～鐘崎の視界百八十度の玄海灘は、五穀豊穣、海上安全を願う秋の大祭に相応しく晴れ上がり、爽やかな風が吹いている。大漁旗を掲げた漁船が次々に加わり、その数百隻を越す。約十五キロのコースを一時間くらいかけてパレードする。

御座船を囲む船団秋祭　　由紀子

御座船を取り巻く漁船秋の潮　　節子

エンジンの音の海鳴り浦祭　　光子

まつり舟色とりどりの大漁旗　　節子

波いよよ高くなりけり浦祭　　節子

七五十年前から続いている「みあれ祭」の海上パレードは、宗像七浦の漁船四百～五百隻が大漁旗や幟を掲げて参加し、その煙で空は真っ黒になる程で、エンジン音や花火、汽笛などが鳴り響いていたらしい。近年は漁師が減り、百隻くらいになったと地元の案内ボランティアが教えてくれる。

それでも船団が鐘崎港から向きを変えて、いよいよこちらに向って来ると迫力があり、壮大な絵巻のような光景に胸が高鳴る。白い幟を掲げた二隻の御座船と大漁旗の漁船がぐるぐると回る。想像以上に船のスピードは速く、ぶつからないかと見ている方がハラハラする。十～二十分くらいだろうか。渦巻く海を見ていると時間が経つのも忘れる。やがて御座船は神湊に入港し、漁船もそれぞれ戻っていく。見物客も三々五々散り始め、かき混ぜたように高くなっていた波も元の静けさを取り戻している。

三柱の神輿渡りし秋の海　　光子

御座船の去りし祭の浦静か　　節子

船から下ろされて神輿は、一旦港の傍の小高い山の「とん宮」に案内され、その後車で五キロ先の宗像大社（辺津宮）に移動し、三神が揃った後、秋の大祭が三日間行なわれる。

今回は海上パレードのみの見学だったが十分満足。早朝節子さんのご長男「てるお君」から電話が入り、今から小倉から自宅へ帰るというので、それなら途中下車して「魚屋本館」に来るようにということになった。一年に一度の一時間の「みあれ祭」に間に合うなんて何と幸運。一緒に「みあれ祭」を見物。終了後宿の送迎バスで、宗像の「道の駅」に寄り東郷駅にと戻る。近くの日本料理の店「史」にて昼食。句会は前回と同じ水出しコーヒー掛けかき氷の美味しい喫茶店にて行なう。かき氷は九月までのメニューだったが、一人分のみ出来るという。おばさん達の話をしっかり聞いて対応してくれる爽やかな「てるお君」にどうぞ！。

【神湊付近の海岸】

【鎮国寺境内の彼岸花】

【鎮国寺本堂】

【御一行様の札】

【食事処「史」】

【宗像の「道の駅」】

第七十三回吟行記（特別編）

郷土の女性俳人「竹下しづの女」

短夜や乳（ち）ぜり泣く子を須可捨焉乎（すてっちまをか）

しづの女

大正元年、結婚式での竹下しづの女。夫・水口伴蔵は福岡県立福岡農学校の教諭だった。

大正九年の「ホトトギス」八月号で雑詠巻頭に選ばれた句である。作者は福岡県京都郡稗田村、今の行橋市に生まれ育った「竹下しづの女」。彼女は杉田久女より三年早い明治二十年生まれ。大正八年の冬、三十二歳で吉岡禅寺洞の指導で俳句を始め、翌年には、「ホトトギス」の巻頭をとったのである。彗星のように躍り出て、俳句界に衝撃を与えたこの句は賛否両論で、「すてっちまをか」とは何事かと、また漢文の知識をひけらかして生意気だ等々の非難も受けるが、「すてっちまをか」の叫びは、それまでの俳句にない強烈な表現として虚子の目にとまった。

「竹下しづの女」の本名は静廼（しづの）。行橋の庄屋の跡取り娘として育ち、福岡女子師範学校を卒業、小倉師範学校助教諭を務める。二十五歳に福岡農学校教諭の水口伴蔵を婿養子に迎え結婚。俳句を始めたのは結婚後、俳誌「天の川」を創刊したばかりの吉岡禅寺洞と出会ってからである。「天の川」は新興俳句の系譜下に入るのだが、しづの女が係わっていた頃はまだ「ホトトギス」の傘下の俳誌だったらしい。しづの女が巻頭をとってから、「短夜や」を詠まれた先生はこちらですかと次々に見知らぬ人が訪れたらしく、その煩わしさもあってか、「俳句の主観、及び季の問題に懐疑を抱く」と言って作句を中断する。再開したのは八年後の昭和三年で、福岡に来た虚子と会ってからのことだったという。ホトトギス同人になる。

しづの女と次男・健次郎

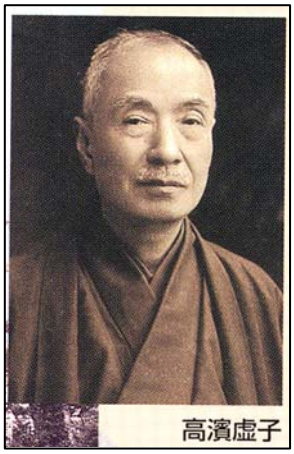
それにしても「須可捨焉乎」（すてっちまをか）とは大胆な表現である。当時の授乳は母乳のみで、母親、妻、勉強で疲れ果てた体に、乳不足で泣きやまない赤子を抱いている姿が浮かぶ。だがこの句の漢文表現に大きな意味がある。「須可捨焉乎」には「捨

昭和初期の竹下しづの女。

てるよ、否、捨てはしない」という反語の意味が含まれているからこそ、母として言える表現で、泣く赤子をしっかり抱く母親の愛情が結晶した句として巻頭をとったのだ。

昭和八年一月夫が急逝する。しづの女四十六歳。子供の養育のため福岡県立図書館の出納手として勤務することになる。女性が社会で働くことが少ないこの時代に、男性とともに組織の中で仕事をする女性を「職業婦人」と呼んでいたが、職業婦人として俳句を作った最初の女性といえる。

汗臭き鈍（のろ）の男の群に伍す



本来、女丈夫で単刀直入、さっぱりとした気性のしづの女には同じ職場のぐずぐずした男たちに腹を立てることもあったのだろう。俳句に関しては昭和十二年、「高等学校俳句連盟」（後の学生俳句連盟）を結成。長男の吉信が俳句にかかわったこともあってか、学生を対象にした俳句の場つくりに尽力をつくし、「高等学校俳句連盟」の機関紙「成層圏」の指導にあたっている。指導協力者として中村草田男を推薦、草田男は東京での「成層圏」句会の指導に当るという画期的なことを実践している。この中の学生会員に金子兜太がいたというから歴史を感じる。この「成層圏」は昭和十六年に戦時下の統制で廃刊となっている。

昭和十五年に句集「颯」（はやて）を刊行。この句集に寄せた虚子の序句が

女手の雄々しき名なり矢筈草（やはずそう）　虚子

俳句に関する評論を多く書き残し、当時の「ホトトギス」の女性俳人で評論という体系をもった文章を成したのはしづの女がはじめてと言われている。俳句を志すものを育てていこうとする行動力と俳句を理知的に把握しようとする理論家としての彼女の功績はもっと評価されてもよいくらいだ。

女丈夫と言われる彼女も、戦争という「ただならぬ世」を不安に思いながら送り出す母親の心情を句に残している。

母の名を保護者に負ひて卒業す

ただならぬ世に待たれ居て卒業す

昭和十九年戦争に送り出したばかりの長男は結核にかかって二十年に病没。三十一歳。

米提げて戻る独りの天の川

天に牽牛地に女居て糧（かて）を買ふ

しづの女は田を耕すために、農地の側に粗末な田小屋を建てていた。

農地改革の時、行橋で五反歩の田に田小屋をたてて米を作り、子供達に運び、母親を看病し、九大俳句会の指導もする。長男の死や戦後の混乱の中で心労を重ね、昭和二十六年、六十四歳の生涯を終える。

北九州の女性俳人と言えば「杉田久女」や櫓山荘の「橋本多佳子」がよく取り上げられるが、北九州市から車ですぐの行橋市で活躍し、久女らに劣らず強力な個性を発揮した「竹下しづの女」を忘れてはいけない。

昭和五十四年行橋市に建てられた句碑は代表作とされる。

緑陰や矢を獲ては鳴る白き的

（昭和十年作：ホトトギス巻頭句）

参考資料：「俳句あるふぁ」「人間講座　宇多喜代子　女性俳人の系譜」

「ふるさと北九州　櫓山荘をめぐる女たち」

生地・行橋市の中京中学校校庭に建つ、竹下しづの女「ちひさなる花雄々しけれ矢筈草」の句碑。

【「竹下しづの女」の故郷・行橋市の長峡（ながお）川と句碑】

【JR 行橋駅】

【八社神社の隣にある「竹下しづの女」句碑】

【周防灘の沖まで続く干潟：長井浜】

第七十四回吟行記

平成二十二年十二月九日（木）

参加者　佳与子　節子　光子　真理子　由紀子

百道浜、西南学院大学周辺（福岡市早良区）

今年の忘年句会は全員集合にはならなかったが、福岡の副都心・西新をゆっくり散策できたようだ。佳与子さんの入院している病院が西新にあるので、佳与子さんを誘って、吟行できる人はその界隈を吟行し、句は吟行句はもちろん「もちより句」でも良しとして句会を計画。これならば皆参加しやすいだろうと自画自賛の計画だったが、私自身が皆と吟行出来ず、食事のみの参加となってしまった。今回皆の御選句をこの場所で作ったのではと勝手に推測しながら掲載。ご了承ください。

西新にある母校「西南学院大学」のキャンパスを歩いたのは卒業以来。本館など変わっていないが、新しく建て替えられたチャペルや部室などが入っている「西南会館」「学術研究所」などの新館に目を見張り、特に「西南高校」跡に建てられた「大学院」「大学博物館」「西南コミュニティーセンター」などには年月が経ったことを実感する。「あれから四十年・・・・変わったなー」の心境である。

隣にあった当時の西南高校は男子校で、本館建物は赤いレンガ造り。レンガの校舎に蔦が絡まり、まさにペギー葉山の「学生時代」の歌詞そのもので美しかった。平成に入り男女共学、中高一貫になってから校舎が移転したらしい。高校跡地に建つ一見カフェらしい赤レンガの建物は学食で、その奥に大学院や法科大学院、大学博物館らが建つ。

クリスマスツリー法科のロビーにも　　真理子

大学の門にもクリスマスリース　　光子

枯芝に大学博物館の影　　節子

ステージはポインセチアで縁取られ　　光子

旧高校の蔦の絡まる赤レンガの本館が、耐震補強され「大学博物館」（創立者の宣教師C．K．ドージャー氏を記念してドージャー記念館とも呼ばれている）として残っている。パンフレットを見て驚いた。近江八幡で見学した洋館の設計者・ヴォーリズの設計なのである。一九二一年建立の三階建ての洋館は、現在福岡市の有形文化財になっている。

大学のキャンパス内の松も健在で、太く長い枝を伸ばしている。チャペルは新しくなっており、新旧相まってのキャンパスは懐かしくもあり、目新しくもあった。体育館の南側に「元寇防塁」の遺跡が保存されている。

学生の頃、すぐ近くを走る市電の電停「防塁前」で下り、毎日のように通っていたのに、草の茂る中にある小さな社しか記憶がない。このようにきれいに保存されたのはいつのことだろう。

キャンパスに残る防塁新松子　　由紀子

黒松の脂の匂ひや漱石忌　　光子

枯芝に松ぼっくりと群雀　　佳与子

学内にきし献血車クリスマス　　真理子

冬紅葉パイプオルガン聞こえ来る　　光子

大学前の道を隔てて、名門進学校「修猷館高校」がある。前身は黒田藩の藩校で、ここから輩出された著名人は多い。ちなみに千種さんの

母校でもある。

吟行当日の十二月九日は「漱石忌」なのだが、「修猷館高校」と漱石は縁がある。当時旧制第五高等学校教授であった漱石が英語授業の視察で修猷館を訪れ隈本館長に面会しており、隈本館長は、漱石の小説「坊っちゃん」に出てくる数学教師・山嵐（堀田）のモデルとされている。

創立二百年を記念して風格のある校舎は順次建て替えられ、私の記憶にある校舎とは全く様変わりしている。佳与子さんの病院は修猷館高校の正門前で、しばらく校舎を眺める。皆ここで待ち合わせしたようだ。佳与子さんの早い回復を祈る。

年忘れ病院前で待ち合わす　節子

快方に向かひし病年忘れ　節子

お見舞いの句会となりぬ漱石忌　真理子

戻りてもひとりの師走病室に　真理子

午後九時のノックはナース冬の星　佳与子

大学裏の大通りから海側は埋立地を開発し、ドームや福岡タワー、領事館などが建ち並ぶ。大学周辺や修猷館高校前の「脇山口」の通りから一筋中に入ると、まだまだ昔からのリヤカー部隊など庶民の街の顔が残っている。糸島方面から新鮮な野菜や魚貝類をリヤカーに積んで通りで売っている。学生向けの洒落た店もあれば、小商いの菓子屋や総菜屋などが軒を連ねる。

西新にリヤカー部隊年の市　佳与子

食事処は「ヒルトン福岡シーホークホテル」。ヤフードームの横に建つホテルは、バブル絶頂の頃ダイエーがドームと対のようにして建てたホテル。その後斜陽のダイエーが手離し、日航が再建に入るも、今はヒルトン系列に入っている。利用する側としてはサービスが向上すれば有難い。

横を流れる樋井川の周辺は「よかトピア」通りから緑道として整備されている。百道浜の住宅、目を引くハイアットホテル、「九州医療センター」前のモニュメントや歩行者専用橋などを見ながら「シーホークホテル」に急ぐ。ホテルロビーにクリスマスツリーが高々と飾られている。

冬の日の届き始めしビル谷間　節子

鴨に餌撒く人に鳩群がりて　節子

大聖樹皆健康で仰ぎたし　由紀子

短日のラッシュ見下ろすブッフェかな　由紀子

このホテルには後日、嫁、孫と一緒に宿泊し、近くの「こども病院」で検査を受ける。二度の検査の結果「心配ないでしょう」という医師の言葉に胸をなで下ろす。また新しい年が始まる。皆の健康を願うばかりである。

【元寇防塁の案内板】

国指定史跡

元寇防塁

Genkou-Bourui Stone-Wall at Hakata Bay

Nationally Designated Historic

13世紀初め、チンギス・ハンはアジアからヨーロッパにまたがるモンゴル帝国をうちたてました。その孫、五代皇帝フビライは、国名を元と改め、日本に使者を送り通交を求めました。しかし鎌倉幕府がこれに応じなかったため、1274年博多湾に攻めこみ、その西部に上陸し九州の御家人たちと激しい戦いをくりひろげました(文永の役)。

幕府は、元の再度の来襲に備えて、九州各地の御家人に命じて、1276年3月から約半年間で、西は今津から東は香椎まで博多湾の海岸沿い約20kmにわたる石築地(元寇防塁)を築かせ、その場所を警備させました。

防塁は各国の分担地区によってその構造が違うことが分かっています。石材は近くの山や海岸などから運び、全体を石で築いたり、前面だけを石で築くなどの工法が採用されています。防塁の高さは2.5～3mほどと考えられます。

この西新地区(当時の百道原)分担国は分かっていません。防塁の構造は粘土による基礎工事を行い、基底部幅3.5mの前面と後面に石積みをし、その間を砂と粘土でつめています。石材の節約をはかった独特の工法となっています。

1281年元は再び日本を攻めましたが、この元寇防塁や武士の元船への攻撃にはばまれ、博多の地には上陸できませんでした(弘安の役)。

元寇防塁は、1931年(昭和6年)、国の史跡に指定され、保存されています。

The Mongol invaded *Hakata* Bay and landed in *Fukuoka* in 1274.
The *Kamakura* shogunate therefore ordered *Kyushu* warriors to build the stone wall for 20 kilometers long along the beaches of *Hakata* Bay in 1276, and the stone wall of nealy 3 meters high was completed in six months .
The second invasion of 1281 failed to land because of the stone wall and attacking the Mongol fleet.

2000年3月　福岡市教育委員会(The Board of Education of Fukuoka City)

みんなの文化財を大切に

【史蹟　「元寇防塁跡」】

【福岡出身「長谷川町子」の
サザエさんの陶板】

【樋井川にかかるふれあい橋】

自選句

（三十二～三十七）

自選句　三十二

「平成二十一年十二月投句」より

一盃の酒に六女年忘　　真理子
捌かれて海鼠腸花のごときもの
読書録記せし父や漱石忌

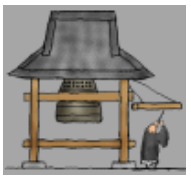
舌先にはじけるお菓子小六月　　佳与子
川端に寄せて師走の荷をおろす
海鼠腸の熟成三日云々と

人気なき朝の花街に風花す　　由紀子
冬帝や酒蔵の湯気上りゆく
さよならを言わぬ別れよ冬珊瑚

二羽づゝと見えなくもなく鴨の陣　　光子
蔓荊の実に香りあり冬の浜
店番は御内儀一人雪もよひ

風邪引きのかすれし声の艶めきて　　聖子
大潮に渡る宮島冬の月
苦も楽も折り合ひつけて年の暮

街なかの運河に溶けてゆく小雪　　節子
集合の博多駅前着膨れて
お勝手の抽斗にある寒さかな



「平成二十二年一月投句」より

手拍子を客にも請ふて猿廻し　　佳与子
御神馬の留守の厩や寒の入り
寒灯をともせしコード杭を打つ

福引に当てし一升を抱え来る　　由紀子
くつろぎて鴨居に掛けし毛皮かな
藁笠に天衣を解く冬牡丹

立たなむと己鼓舞して二日かな　　光子
風花の参道となる天満宮
笑ひ初め笑ひ通せし句座なりし

足るほどにおでん炊くなり子の帰郷　　聖子
寒の雨だんだん強くなる気配
初詣遅き歩みの太鼓橋

丁度よき小雨の中のどんどかな　　節子
山積みの飾り次々投げ込まれ
西空に寒月細く尖りたる

子猿の名太陽といふ雪舐めて　　真理子
太鼓橋渡りゆく笑み着ぶくれて
ひと葉なきひろ葉ちしゃの木寒に入る

自選句　三十三

「平成二十二年二月投句」より

掌にあまる一花の落椿
水煙に梅匂い立つ国分寺
雨雫宿したままに落椿　由紀子

拾ひたる穂俵波に洗ひけり
マニキュアの色に迷ひて浅き春
一幕見待つ人の背に春の雪　光子

もういいかバレンタインは日曜日
縁切りも縁の結びもある梅に
神殿の階駆ける鬼やらひ　聖子

護摩堂に歳徳神の大唱和
落椿つなぎて花の首飾り
初午のバス大鳥居くぐり抜け　節子

面白き法話に集ひ一の午
夜鳴きせる犬にいかがや二日灸
白梅を吸ふは煙草と思はずに　真理子

寒牡丹こんなに硬きつぼみとは
雨かとも思ひし梅のしずくかな
節分や御福の面をくぐり抜け　佳与子

「平成二十二年三月投句」より

陽炎ひて飯豊は空に浮かびたる
天空に残雪の飯豊浮かびけり
白魚の簗八連のジグザグに　光子

白魚の簗まで歩く河畔かな
白魚を狙うかもめの急直下
引鴨の列長々と河口まで　節子

島ふたつ陽炎ふ浜の砂を踏む
白魚の簗にうなぎも鮎も入り
土筆摘み水汲む文殊さまの山　真理子

白魚の不漁をかこつ日向ぼこ
幾重にも曲がる岬道落椿
屋根替へて美しき反りもどりけり　佳与子

土地人らし自転車籠に若布竿
春疾風露店の桶を転がして
陽炎を行き花束とワイン買ふ　由紀子

自選句　三十四

「平成二十二年四月投句」より

このところ担がれもせず四月馬鹿　聖子
井田の一つ芍薬芽吹きたる
手をつなぐ夢なんか見て朝寝して

たよりなく揺らす風あり榛の花　節子
どこからも桜の見える体育館
バドミントンコート春風しめ切って

たんぽぽの絮をぱくりと幼き子　真理子
踏切を渡り駅まで雲雀の野
春疾風二両電車の来るカーブ

たんぽぽの絮吹いてみし父をまね　佳与子
つちふるや箍のゆるびし寿司の桶
片のれんくぐり花見の客となり

春光のさざ波となる山の池　由紀子
池の鯉跳ねて春日のゆらぎをり
浮島に首伸ばす亀さくら散る

幾万の花ひらくとき朝寝して　光子
ライラック花下白鬚の父立ちぬ
問ひかけて堂々巡り花の闇

「平成二十二年五月投句」より

カタカナの名前はためく初幟　節子
石炭を運びしレール草茂る
ハローワークなんじゃもんじゃのバス通り

青葉風ペンの音ふと紛れしか　真理子
煤けたるビル窓のなりべゴニアに
忍冬犬の匂ひの残る紐

迷路めく路地も鎌倉桐の花　佳与子
名も知らぬ木々を見上げて路地薄暑
子燕の嘴より餌のこぼれきし

一村の真中たばしる雪解川　由紀子
見えをきるごとく蜥蜴のとまりけり
路地薄暑手押しポンプの水弾け

梢見て空見て春を歩きけり　光子
黒板の遺墨を五月の風渡る
ゆく船の吃水線高き夏霞

空色のギンガムスカート更衣　聖子
切り売りもしますと白きネル広げ
椎落葉未だ疫病衰へず

自選句　三十五

「平成二十二年六月投句」より

漁師等のたむろしてをり梅雨港　真理子
梅雨じめりして鹿の角祀られて
会釈して禰宜ひとりみる梅雨明り

梅雨深し鵜とも鷺とも岩礁に　佳与子
黒き眼をもちて蟷螂うまれけり
寄港地を三つ経てきし梅雨の島

濃あじさい島に古代の資料館　由紀子
亀石というが祀られ夏の潮
父の日や父になる子に祝われて

父の庭狭めて茄子の花咲けり　光子
庭植ゑの桐の花咲き会津かな
思ひ出はジグソーパズル明易き

受け継ぎし庭二百キロ実梅とれ　聖子
短夜や今日も隣りの犬の哭く
騒ぐ程鴉荒らしてをらぬ枇杷

片陰に並ぶ団地の停留所　節子
改装のホテル入口燕の巣
出港の船に海月の集まりて

「平成二十二年七月投句」より

こもごもと虫の張り付く網戸かな　佳与子
鳥かごを吊るす縁先蒲むしろ
店先の野菜引っ込め日除けして

蟷螂の子の散りぢりに蒙古塚　由紀子
磯蟹のはさみ岩場の割目より
雲の峰飛行機雲はその上に

山笠走る先へ先へと勢い水　光子
山笠解いてやうやく見せし笑顔かな
鵲の木立より飛び草に跳ね

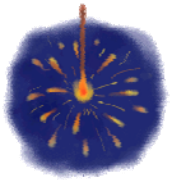
八枚の簾を掛けて季の始め　聖子
晴れ三日目の初蟬四方より
胡麻鯖をくれし魚屋博打好き

廻り止め手放しで泣く山笠男　節子
水城にも高速道路合歓の花
日盛りの瓦を雀つーっと滑り

旅終えて梅雨の漏りなど確かめり　真理子
指入れて見て深かりし蟬の穴
青葉木菟見し夜の闇のふかみどり

自選句　三十六

「平成二十二年八月投句」より



児を肩に乗せ進み入る夏の海　由紀子
話すこと食べること好き生身魂
髪乾び炎暑の中を戻りけり

手花火を囲む鼻緒の輪のできて　光子
皆静か線香花火するときは
おはしょりをほどきし浴衣金魚柄

今朝の秋稜線しかと利尻富士　聖子
踊り子の指先までもたをやかに
阿波踊り囃し言葉も調子良く

赤ん坊遠花火には興味なく　節子
夕支度つくつく法師忙しなく
一心に花火線香見つめる目

神木の楢の大樹の蔭涼し　真理子
ひるがえるとき胸朱き夏燕
神域の島よく見えて秋立ちぬ

「平成二十二年九月投句」より

籠一つ分の静まり虫を売る　光子
砂時計裏返しては秋灯下
式挙げし宮いま秋よ樟匂ふ

池の面に鯉より赤き赤とんぼ　節子
目の合いし蜥蜴ペロリと舌を出す
白色の花に絡まれ男郎花

仔犬噛みしだきし糸瓜一面に　真理子
虫売のゐる暗き灯に近づきぬ
椋鳥か絞り帯揚げ投げしごと

賜りし盆の供物や菊模様　佳与子
虫の声真似つつ男虫を売る
護符を売る禰宜は見習い秋簾

刈り積みし草に混じゐる彼岸花　由紀子
ふふと紅差して風過ぐ酔芙蓉
赤蜻蛉国境石に止まりては

自選句　三十七

「平成二十二年十月投句」より

御座船を取り巻く漁船秋の潮
波いよよ高くなりけり浦祭
御座船の去りし祭の浦静か　節子

王墓へと続く道なる昼の虫
コスモスや研ぎ師来ている直売所
コスモスの揺れ止まざるにカメラ向け　真理子

手のひらに集めて軽し式部の実
ポコと音たててあけびの割れにけり
大役を終えし神楽男新酒酌む　佳与子

山襞の靄に朝日や秋祭
神輿乗る船の御旗や秋の晴
犬吼えてをりし月夜の青瓢　由紀子

三柱の神輿の渡り秋の海
岬山に秋晴となる日の出かな
浅草に買ふかりんたう秋の暮　光子

「平成二十二年十一月投句」より

二三戸の里隣り合ひお茶の花
蕎麦刈りて蕎麦殻も売る山の店
観音を秘して山すそ蒟の畑　真理子

押せばすぐ変はる信号花八手
一雨の後の青空蕎麦を刈る
十枚の十色の紅葉拾ひけり　佳与子

小春日や小さな欠伸の嬰を抱く
街覆う十一月の黄砂かな
学生に混じり学食蔦紅葉　由紀子

あらかたは済みし蕎麦刈村歌舞伎
大綿や田舟といふが水の郷
脚高きグラスや冬の星の下　光子

蕎麦を刈り終えし畑の広さかな
参道の中学生の落葉掻
水選び育つ真珠や鳥の湖　節子

あとがき

「響風」の発行は、前年のＨＰ掲載分を二月に印刷・製本、三月の吟行時にあしや句会の皆さんに配布できるスケジュールで作成してきました。今年は諸般の事情から、三月末発行に四苦八苦の状態となりましたが、継続することが大事と言い聞かせ、なんとか発行の運びとなりました。

さて、昨年の流行語大賞にもなったＮＨＫ連ドラ「ゲゲゲの女房」は、漫画家「水木しげる」の奥さん・武良布枝さんの自伝記をドラマ化したもので、近年のＮＨＫ連ドラでは大ヒットとなり、発行人も毎日欠かさず観ていた様です。

一方、編集担当が「水木しげる」の本名を「武良　茂」と知ったのは、会社のボート仲間に一橋大学ボート部ＯＢの武良氏が入社・八幡に配属された時に伯父さんが漫画家の「水木しげる」だと聞かされた時（昭和五十五年頃）だったこともあり、少なからず共感を覚えていました。

また、編集担当はもともと少年漫画大好き人間であり、「手塚治虫・白戸三平・横山光輝・藤子不二雄・ちばてつや・永井豪」等々の漫画を学生時代～社会人の間に買いため、結構な量の蔵書となっています。しかしこれらは本棚の後面に追いやられ、今や前面の俳句集に占領されている状態。

こんな中、初期作品の「水木しげる集（一九六九年初版本）」が一冊残っていました。「鬼太郎」の誕生物語である「幽霊一家」や「河童の三平」・「悪魔くん」といった作品集です。連ドラの中で売れない貸本漫画家時代の作品として「悪魔くん」や「墓場の鬼太郎」（後の「げげげの鬼太郎」）が登場したこともあり、発行人も初期の「水木しげる」作品を読めた事でよりドラマに共感でき、編集担当の漫画収集趣味も捨てたものでは無いと思わせた一瞬でした。

予想もしなかった「東北関東大震災」の連日の報道の中での発行となり、気分的にも内容的にも、今一歩の感はありますが、俳句より少年漫画好きの編集担当一家の一部をご紹介させて頂き、編集後記といたします。

ホームページ・編集担当　寛

響　風－Hibiki　Winds－

あしや句会　第６号

平成 23 年 3 月発行

発行人：江本　由紀子